# 妖精な妹は夜だけ魔王

kikiakiakia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖精な妹は夜だけ魔王

【Ｎコード】
Ｎ４２００Ｕ

【作者名】
ｋｉｋｉａｋｉａｋｉａ

【あらすじ】
かわいがってきた美人の妹は、なんと魔界の「魔王候補」これから継承権をめぐって、王位争奪戦をはじめなくてはいけません。兄としては応援を頑張りたいと思います。脇役主人公として……。世界の創造と存在意義を問う前に、俺は家に帰りたい……。
ゆるゆるな一人称。危うい兄妹関係を軸に、ご都合主義を含みつつ、間口は相当狭いのですが、王道冒険アクションファンタジーを目指します！
※生まれが恵まれている主人公に若干の最強要素。実妹や亜人にモ

テてしまう、いいのか悪いのかわからない微ハーレム要素があります。２ちゃん派生企画物です。

# プロローグ

相反する存在を、内に抱え込みきれなくなった「世界」は、「世界」を産む。
それはその世界の「人」の意思でもある。

かつて、現在「人間界」と呼ばれる世界は、「魔界」を生み出した。
人と獣が混ざり合う姿を持ち、
異能を使役する同胞（はらから）を受け入れがたいものとし、
自らそれらを切り離したのだ。

世界各国の創世神話に疑問をもったことはないだろうか。
神や魔物と呼ばれる絶対者が、無造作に海を満たし、大地の型を成す。
人に祝福を与え、動物を作り出し、炎を呼び、敵を退治する。

神話の中の神や魔物は、人に近しく、名前を持ち、時に交わり、あるいは罰する。
異能を用（もち）いて。

そして決まったように人から離れていく。

どんなに慕われようと、どんなに憎まれようと、神や魔物は去っていくのだ。
あるいは眠り、あるいは討ち果たされ。

本当は神や魔物が自ら去っていったのではないとしたら？
自分たちが神や魔物を切り離したのだとしたら？

神話の世界は去るのではなく、むしろ人が神話を切り離すのだとしたら？

## 1（前書き）

初投稿です。
こんな感じでいいんじゃないか？という現時点での手探りを形にしてみました。

# 1

朝っぱらだというのに暑い。いや熱い？のか。
まだ朝七時だというのに完全に目が覚めた。
何だろう。変なプレッシャーを感じる。猛暑がせまってくる気配だろうか。
寝巻き代わりのTシャツがじんわりと汗ばんでいるのだ。
近いということだけで選んだ学校は、八時半に家を出れば間に合う。
今日はシャワー浴びてから出よう。余裕だ。この時間なら誰も風呂なぞ使わない。

部屋にわだかまる熱を振り払いたくて頭を軽く左右に振る。のろのろとベッドから体を起こす。
とそこで、部屋の外からさわやかなかわいらしい声がかかった。
「シン兄(に)ぃ？起きてる？」コンコンと同時に軽くノックをしてくる。
妹のルミだ。シンとは俺の名前である。
「お？おう」反射的に返事をしてしまう俺。起こしに来てくれるなんていつぶりだろう。
「母さんが呼んできてって」
台所にみんないるから。
残りの台詞は歩き出しながらだったのか。パタパタと軽やかなスリッパの音をさせながら声が遠ざかっていく。
数年前まではノックもせずに扉を開けて、寝ている俺にフライングボディアタックをかましてきた妹が変われば変わるものだ。まあ。

今は「妖精姫」様だしな。
しかしルミのおかげで妙なプレッシャーが弱まった気がする。
ありがたいようななんとはなしにさみしい気分を味わいながら、俺は台所に行くためにもそもそとハーフパンツを身につけ始めた。ああそうです。俺はシスコンです。

◆

「は？へ？」
思わず声が出てしまった。台所に辿り着いた俺を待ち受けていた光景は、正月にも見られない「一族全員大集合」の図であり、こんな猛暑の六月にみられるはずのないものだった。
群馬県にいるはずに大じいちゃん、大ばあちゃん、（一般的に言うところのひいじいさんにひいばあさん）北海道にいるはずの父方のばあちゃんに、岡山県にいるはずの母方のばあちゃん。
荒門（あらかど）さんちに婿に行った兄貴にその嫁さんのキリエさん。まあこれはお隣さんなのであるが。
もちろんこんな大所帯が台所一室に収まるはずもなくキッチンに隣接するリヴィングとの仕切り戸は取っ払われて、皆が思い思いの場所に座っている。
みんなの中心、背もたれの大きい、迫力のある椅子に腰掛けているのは大ばあちゃんである。というかその椅子はどこから来たのでしょうか。どうみても俺んちのものじゃないですよね。
ルミは大ばあちゃんの足元のクッションにかわいらしくちんまり

と座っている。１６歳になられる我が妹は、そんな風にしていると中学生くらいにみえて、なんだか俺は色々心配です。
兄貴とその嫁さんは二人がけのソファに。母さんと父さんとばあちゃんズは食卓に。ひいじいちゃんと、誰だか知らない人が各々一人がけのソファに。

どうも俺は乗り遅れたらしい。その場の雰囲気に飲まれながら椅子を探すが空いてない。
知らない人の名前も聞ける雰囲気ではない。というか何故外人が。外人だよね。アレ。

母さんと大ばあちゃんにギロリと睨まれ、俺も食卓の椅子を確保している父さんの側にあわてて体育座りで座り込んだ。ケツが痛い。床はフローリングである。何故か胡坐をかく余裕はない。いや何故だ。

俺が座り込むのを目で追っていた大おばあちゃんが声を発した。
「ふむ。よく育っているね」
張りのある低い声だ。おん年何歳だったろうか。忘れた。単細胞の俺が覚えているのは一個下の妹の年齢と誕生日と身長と体重だけである。

なんだろう。ひ孫が育ってる感慨ではない、なにか値踏みのような？ペット？ブリーダーが売りに出す子犬にかける言葉のような？
どういうことでしょうか。俺はこのひとからしたらかわいいひ孫じゃなかったでしょうか。
あったのは十年ぶりくらいだけど。

側にいる父さんが、小さく息をついた。なんだかつらそうだ。というか俺もつらい。なんだろうこの重苦しいプレッシャーというか

雰囲気は。

「まあサルミスラの哺乳瓶ぐらいにはなるだろうよ」

大ばあちゃんが俺に目を据えたまま言葉をついだ。

え？俺哺乳瓶？？？ほにゅうびん？？？何それエロい……というか「さるみすら」って何？

◆

「ベル、始めなさい」

大おばあちゃんがあごをしゃくった先は、大おじいちゃんの側にいる見知らぬイケメンにである。

ん？ベル？ベルというのはうちで飼ってるエアデールテリアであり、茶色い巻き毛のイケメン外人さんに呼びかけるにはちょっとおかしい。毛色は似ている。というかベルはどこだ。

その前に「俺＝哺乳瓶」の話はどうなった。

俺はこのどうにかなりそうな重苦しいプレッシャーの中、口を開こうと――

したところへ、スッと肩に手を置かれ、途端に俺の口はぴったりと閉じた。

俺の右側にいる父さんの手だ。なぜだかどうしてなのかわからないが俺は口が利けなくなった。体も動かない。早朝から金縛りだ。

イケメン外人がソファから立ち上がり、俺にチラっと目を向けて…眉を寄せた。

なんなんだ。そのかわいそうな生き物を見るような視線は。

我が家の愛玩犬と名前が一緒なのはお前のほうである！

俺も動けないなりに目で問いかけるが、奴は目をそらし、大おばあちゃんに一礼すると、わざとらしく咳払いをしてから、話し始めた。

「それでは、確認してまいりました、王位争奪戦にあたっての注意事項を述べさせていただきます」

うむ。どうみても外人さんですが流暢な日本語で…いやいやいやいやツッコミどころが多すぎるわ誰か。誰か俺の代わりに何か言え！！王位って何？！

はい誰も突っ込まない。静まり返ったリビング&キッチンにベルさんの声が続いていく。

「先日、自主的に退位をなされた第１１代魔王であるイシュヴァルト様よりの布告により、次代の魔王の座は、六大公家で争うことになりますが、イシュヴァルト様の御生家であるハミアス家は参加なさいません。残り五大公家で覇権を競うことになります。参加資格は五大公家に連なるものであり、各家〔最年少者から数えて三人目までです〕。当家カルーベルで資格を持つのは、ハルノヴァック様、シンゼラート様、サルミスラ様であり、他にはございません」

ハルノヴにシンにサ「ルミ」スラね。どっかの三兄妹に名前がすっごく似てるね。うちの苗字は軽部（かるべ）であってカルーベルとかいうチーズ臭い名前じゃないけどね。

俺は体育座りの状態からピクりとも動かず（動けず）いじけていた。さっぱり話がわからん。というかわかりたくない。哺乳瓶疑惑も気になる。

「そしてハルノヴァック様とシンゼラート様には「力（ちから）」はございますが、皆様ご存知の通り、「魔力」がほとんどございません。当家が担ぐのはサルミスラ様だけになります。ここまでの説明に、何かご質問はあるでしょうか」

ベルさんが、いったん言葉を切った。あーなんだかベルさんが犬のベルに見えてきた。俺目がおかしい。

そうね。力持ちだよね。俺。兄貴も。腕力に物を言わせて妹にたかる虫をちぎっては投げしてきたもんね。

なんだかな。さっきから家の外の物音がいっさい聞こえないんだが。どういうことでしょうか。

それに質問したいというより体の硬直が痛い。特にケツが。

「ベルさんはベルなの？」

鈴を振るような声がして皆の視線が大ばあちゃんの足元に注がれる。

もちろんそんなかわいらしい声が出せるのはルミだ。というか質問そっちか。まあ気になるが。

「はい左様でございます。サルミスラ様」

ベルはそう言いながらルミの前に片膝をついた。もしかしたら大おばあちゃんの前に膝をついたのかもしれない。まあどっちでもいい。彼は高校二年生でしかない女の子の前に跪いたのだ。大の大人が幼い少女の前に大真面目に跪く。へんてこな光景だ。

あげくにベルさんがベルなんだってさ。なんかどうしようもねーな。何言ってんだ。お手でもしろ。

俺は、ただただ自分の妹が「魔王候補」であることが前提で場が進むことに、どうしようもなく混乱していた。

◆

ベルさん＝ベルは立ち上がり説明を続けた。

覇権争いは日本時間の七月一日、深夜１２時を持って始まるということ。

戦ってもよいのは深夜１２時から朝の４時までの間だけであるということ。魔界の中だけに限るということ。

その四時間の間、候補者は絶対に魔界にいなければならないということ。

競合相手を殺すか、継承権を辞退させることが勝利条件であるということをざっくりと説明した。

戦う時間に制限があるのは今回からだそうだ。前回の争いで魔界はひどくダメージを負ったらしい。

ダメージ軽減のための措置は退位した魔王が考えたものだという。

うーん。なんのこっちゃ。

ベルは説明を終えると、

「それではお飲み物を準備いたします」と告げてキッチンに向かった。彼の役どころはなんなんだ。

長い長い説明の途中で（ケツの痛みのせいで）現実逃避しかけた俺も、大の大人が何人も早朝から集まっている現状には、ジョークのかけらも感じられず、首をかしげるほかない。まあ首は動かないんですけど。

さすがの俺も今の体の硬直が父さんのせいだというのはわかってきた。いつ開放してもらえるんでしょうか。

父さんは秘孔をついちゃったりしちゃったりするひとだったのかな。

「さて」

重苦しい声がリヴィングに落ちる。

来たよ！来ちゃったよ！何が！大ばあちゃんだよ！

「キリエの所へ婿に行ったからには、ハルノヴァックは話についてこられているね」

もうなんか声にドスがきいてるっていうか怖えーーよこの人。そしてソウナンデスカ…お兄様。

確かめたい。ああ確かめたいが俺の頭が向いている角度からは兄貴の様子はわからない。

そしてヤバイ「ハルノヴァック＝兄貴（ハルノブ）」が今刷り込まれた。俺に刷り込まれたよ！

しかし大おばあちゃんはただふむふむといった感じでうなずいている。

「哺乳瓶はまあしかたないだろうね」

ソレハオレノコトデスカー？俺名無し？いや無機物？

「哺乳瓶と条件はそう変わらなかったろうが、サルミスラ、お前はえらく落ち着いているねぇ」

うおおおお俺の妹はサルがなんとかじゃねーーー！！ルミだ！留美！

俺の叫びは発せられることなく、頭の中でただ響く。

哺乳瓶呼ばわりより、何より、俺は、ただ、俺の妹が、ルミが、なんか違うものだ、と断定されるのが、いや決定されるのが、イヤ、だ……

何だろう脳がぐつぐつ煮えたぎっていくような、体の筋がブチブチとちぎれていくような、変な、俺は…俺は……

「ん」

そこへなんだかフウンとクフンの間ぐらいの、独特にかわいい相槌が聞こえて、その場にいながらにして、どこかへ行ってしまいそうだった俺は気を取り直した。

単純ですか。そうですね。もちろん呼び戻してくれたのはルミの声である。

「結構前かな？自分が人間じゃないみたい？って思うことはあったの」

うん。ルミは人間じゃないみたくかわいいよな。

学校では「妖精姫」呼ばわりされてるしな。

大おばあちゃんはルミに目を据えている。まあ俺もだけど。

「そんな、シン兄ぃやハル兄ぃみたいなわかりやすいバカぢからとかじゃないよ？」

ルミよ。なんだその暗に俺とハルの兄貴は人外ですみたいな言い方は。俺傷つくよ？拗ねるよ？

思い出しながら話そうとするせいかルミの視線はさまよっていて、俺には捉えることが出来ない。

「去年の学園祭で、一年生はお芝居をしたの。わたしは、空を飛べる役だったんだけど……ところどころ本当に空を飛んじゃったんだよね」

おっと。そうだったのか。お兄ちゃん全然気がつきませんでした。ちなみにルミはティンカーベル役でした。「妖精姫」と呼ばれ始めるきっかけであり、そして二年生になっている今、絶大な人気で生徒会長になってしまった原因でもある。ピーターパンは誰だったかな。忘れたいのに思い出せないようなこのもやもや。

と、相変わらず頭の向きすら押さえ込まれている俺の視界に長い脚が二本ドーンと――

「おや、シンゼラート様はまだ動きを封じられているのですね」

これは、ベルさん＝ベルか。ちっ足なげえな。まあエアデールテリアはスタイル抜群だからな。

ああ、なんか俺ベルさん＝ベルを認めてる。

彼は人数分の飲み物を準備してきたようだ。

「四人がかりよ」

それまで黙っていた母さんが、ベルが淹れてきたのであろう紅茶に手をつけながらぽつりとつぶやいた。

なんですと。俺に手を置いているのは父さんだけですが？

食卓についているばあちゃんズが二人してほぉ、とかふぅとかため息をつく。

これはどうも紅茶を飲んでついたため息ではなさそうで。

ばあちゃん達！ひどい！よくわからないけど！

「ちょっとこの子は時間がかかりそう。後回しにしましょう。キリエさん、寝かせてしまってくれない？」

また母さんの声がする。なんでキリエさん？

さらさらと衣擦れの音がして、ベルとキリエさんが俺の目の前で入れ替わる。
目の前にキリエさんの迫力ある美貌が現れ、目が合った――と思うまもなく俺は意識を失った。

◆

背中が冷たい。痛い。ケツの次は背中か。
頬をやわらかな風が嬲る。風？なんで？
目が覚めた。そしてここは外だ。外だがどこだ。空がちょっと紫がかったピンクだ。月？月のようなそうでないような？真っ白な大きな球体が空に浮かんでいる。
昼ではない。夜でもない。ぼんやりと明るい明け方のような夕方のような？
半身を起こすと、俺はでかい豆腐のような真っ白い石のベンチ上にいた。

「起きたのか」
後ろから声がかかる。ふりむけばそこに兄貴と、キリエさんが立っていた。
二人以外に人の姿はない。

「シン君、ごめんね」
キリエさんも口をひらく。
ふんわりと風が吹き抜ける。足元の草がさらさらと音をたてる。
ここは小高い丘の上のようだ。切り開かれた丘のまわりを鬱蒼とした森林がとりまいている。
近づいてきた二人が俺をはさむようにしてベンチに腰をかける。

「こちらにも居住スペースはあるんだが、おまえが暴れるとちょっとな」

兄貴は普通に話しかけてきたが、俺は、何か唐突に言いたいことがどっと胸にあふれて言葉にならない。

こちらってどちら、とか、俺が家で壊したのは階段の手すりと台所の床だけだとか、（学校で壊した色々なもののことはバレてはいないはず）キリエさんなんでそんなドレッシーなんですかだとか。かろうじてそのとりとめのない思考の最後をつかみとり俺は言葉をつむぐ。

「キリエさんって女王様？」

兄貴が容赦なくゲンコツを俺に落とした。痛い。

◆

まあ、なんというかそれからの兄貴とキリエさんの話は長かった。驚くべきことはいくつもある。

ここが魔界であるということ。うちの家族もキリエさんの家族も人間でなく、「地球」というリゾート地で遊んでいる魔族で、しかも六大公家というものにに数えられる、大公家の一つであり、力のある貴族階級であるということ。しかし、力のある魔族の子供は感性が身につき、器が育つまで、力を封じられているのが普通なんだそうだ。

兄貴はしかしキリエさんに見初められ、本来魔族としては、結婚するような年齢ではないのだが、「婿入り」ということで、色々説

明を受けて、キリエさんちに入ったらしい。

らしいというのは、兄貴の年齢に問題があった。兄貴の保護者は今も俺たちの父さんと母さんであり、キリエさんと兄貴は魔界では単なる恋人同士で、なんだかいろいろ複雑なんだと。

兄貴がきっちり結婚できていたら、兄貴の代わりに父さんが「最年少者から数えて三番目」になるのだが、それでもルミが魔王候補であることには変わりがないのだとか。

うちの家系の男子には他人に影響を及ぼす「魔力」がない、そうだ。

これらすべての説明を受けなくてはいけない理由はただひたすらに前魔王の退位。

突然であり、突飛であり、突発であったそれは魔界をまさに大混乱の渦の中に落とした。

そして大事なのは「サ＜ルミ＞スラ」の意思。

そう、我が家のお姫様、俺の掌中の珠、俺の学校の妖精姫にして生徒会長であるルミは、さきほどの一族会議の中、言ったらしい。

「魔王になってみたい」と。

日本時間の、今日の、日の入りからルミの力は解放される。これから毎日。そして日の出とともに、封印が作用する。

もともと四十年は作用するはずだった封印の限定解除なのでそんなことになったらしい。

１７年しか生きていない体で高魔力のコントロールは難しい。
あと二日たらずでライヴァルを抑えこむだけの力とそのコントロールを手にするのに必要なのが、俺の役目である哺乳瓶。
無私なる愛を。すべての肯定を。慈しみ、育もうとする意思を。相手にすべてを委ねることが出来るものだけが、哺乳瓶になれるのだ。
捧げもの、とか生贄とか、まあそんなものであるらしい。そんなら最初から哺乳瓶呼ばわりでなくそういってくれ。
なんということでしょう。本当は伴侶が望ましいのだと。
そしてキリエさんが今妊娠しているので、兄貴はそのすべてをキリエさんに捧げることに精一杯で、ルミを手伝えないのだ。
キリエさんと兄貴に謝られて俺はでも状況把握がしんどくてそれを
「マタニティドレスだったのか」
の一言で流した。

◆

状況をわからせようと、ただそれだけのために魔界に連れていかれていた俺は、自分の部屋に戻されていた。
青を基調としたその部屋は、平々凡々というかなんというか、何も変化はない。俺にも別段変化はない。

俺はベッドの上でぼんやりしていた。いや待っていた。

ルミはちゃんと今日も学校に行っているのだ。本人の希望もあったが、学校でルミによせられる、ありとあらゆる生徒の友情は、恋情は、期待は、すべて彼女の糧になる。ルミのことを好きなあらゆる人間の思いはルミに力を与え、魔力の行使の幅を広げる。

そう言われた。

納得などしていないが。

ずーっと今までルミを守ってきた。迷惑がられても、煙たがられても。

恋にのぼせて告白してくる同年代の男や、アイドルへのスカウト、セクハラ教師、一方的にライヴァル視してくる女の子ですら周囲から追い払ってきた。

武道の心得もなんにもない。習いに行く時間すらもったいなかった。ルミの側についていたかった。

単純に人より恵まれた膂力に任せて、他人をルミに寄せ付けなかった。

ルミは本気で怒ったりたまには笑い転げたり、稀にため息をつきながら俺の行動を受けいれていた。

守りたかっただけだ。他人を傷つけたかったわけじゃない。

ルミがなんたら王位争奪戦に参加する、自分の意思で。俺はどうするべきだろう。何をすればいいんだろう。

考えるのは苦手だ。それでも俺は個としての自分を捨てているわけじゃない。

ルミを守りたいから、という俺の望みを優先させてきただけなのだ。

力を振るう場所が増えるだけだ、そう思えばいいのかもしれない。俺は俺にできることをすればいいのだと。

とりとめのないやくたいもない思いがグルグルグルグル、普段使わない脳みそを酷使しすぎてとろけそうだ。

気がつくと台所での体育座りが癖になったのか体が固まっている。

俺は膝を抱えていた腕をほどき、大げさに音をたてながらベッドに大の字になった。

◆

寝てしまっていたのだろうか。

気がつくと西向きの窓から入る光はやわらかいものになっていた。

そしてベッドの足元からルミの声がする。

「ただいま」

「おかえり」

……

「シン兄(に)ぃがいないってみんなが不思議がってた」

登下校のみならず、昼飯時まで妹の教室に乱入する俺は、確かに目だっているだろう。

他人事なら俺もそいつをアホだと思う。

しかし害虫駆除に休憩はないのだ。

そんなことを考えながら俺は相槌も打てない。

「わたしね？わたしだけが人間じゃなくなったのかも、って思ってた」

お互い人間じゃないと思っていたんじゃなかったのか。

「シン兄(に)ぃも一緒でよかった。嬉しかった」

大事な大事な妹にここまで言われて、不安にさせていて、寝転んで天井を睨みつけたままでいられるはずもなく、俺はゆっくりと体を起こす。

ルミの肩までのストレートな黒髪に、窓辺からの夕日があたって栗色にきらきら輝いている。

ルミは同級生の女の子と違って化粧もしない。髪もいじらない。子供っぽく人の目に映ることを本人は気にしていないように振舞う。気にしているくせに。

形の良い頬にかかったのか、片手でふわりと髪を後ろに流す。もう帰ってきてからシャワーも済ませたのだろうか。ノースリーブのワンピースは夏の間のルミのパジャマだ。

俺が起き上がるのと同時に、ルミがベッドの中心にすり寄ってくる。

「今日ね。学校でいろいろやりかたわかっちゃった」

何・・・だと・・・？

動揺した俺は動けない。変な妄想が頭の中を飛び回る。

「もう、勘違いしないで」

こうすればいいの、と囁きながらペタリとルミが俺の胸元にくっついてきた。

石の様に固まる俺。心臓がバクバク言ってる。

瞬間ぶわっっと体の中心から多幸感が湧き上がってきて、体中が甘く痺れる。切なくて暖かくてなにかきらきらしたものが自分の中を走り抜ける。

なんだ？

「わお」

どうもルミも驚いたらしい。体を引き剥がして後ずさる。

「なん……だ今の？」

さみしい。瞬間与えられたプレゼントを目の前でひょいとひっこめられたような変な気持ちだ。

「そうか。シン兄(に)ぃのは普通の人より多いのか」

意味がわからないことをルミが言う。

俺たちは二人、ベッドの上に座り込んだまま見つめ合っている。

「いきなり焼肉十人前盛られてもちょっと…」

ますますわからん。

「いや十人前というよりフレンチフルコースてんこ盛り…」

どうしたルミ。

「さっきのはなんだ？」

俺はそういいながら、ルミに手を伸ばす。その手はすっと避けられる。

「待って」

言いながらルミが窓を指差す。

「もうすこしで日が沈む」

今日の日の入りは１９時だ。ルミの言う通りまさに今太陽が沈んでいくところだった。

ルミの封印が解ける時間だ。

◆

日が沈んで電気をつけていない部屋は、家の前の街灯の光が射し込んではいるもののほぼ真っ暗だ。

が、俺は夜目がきく。

静かに座っているルミには変化らしきものは見られない、ような

突然部屋が狭くなった、違う、空気がなくなった、わけでもない、気圧変化？

目の、前が、すこし、ブレる。

反射的に俺はベッドから滑り降りた。出口までの距離を測る。

何が起きたのかわからないが、この部屋がおかしい。ルミを連れて出なくては。

扉から目がはなせない、いや、そうじゃない。

ルミのことを考えているのに、ルミのいる方向に首が動かない。

そう、俺が動物的な怯えを感じているのは、ベッドの上にいる「何か」に対してだ。

「よしっ。準備おーけー」

能天気な掛け声が聞こえて、俺はビクリと体を震わせた。

「最初はキスしてみたらいいんじゃないかな？」

「無理です」

ああびっくりだ。瞬間ちゃんと声が出た。問いかけられた内容も理解して返せた。

全神経がそっちに向かっているからだろうか。

「何か」はルミみたいな声だ。

「こっち向いて」

それは結構努力が必要な行為だったが俺は頑張った。

月明かりが射し込み始めていてさっきより明るい。
どうしようもないプレッシャーの正体はもちろんルミだった。ルミにみえる。ルミだと思う。ルミなんじゃないかな。
さきほどと同じように俺のベッドに腰掛けている。姿かたちはなにも変わっていない。

「手でもいいよ」

ルミみたいなルミがこちらに手を伸ばす。
俺がベッドから降りた分距離があって彼女の手はほんのわずか届かない。
俺はしかし、ルミの外見に変化のなかったことにほっとしたあまり、中腰だった姿勢から膝をつき、そのまま床に座り込んでしまった。

「もう！じゃあ足」
言うなりすらりとした足が俺の肩にのせられる。

「……」

「綺麗だよ？さっきシャワー浴びたし」
やめて。ワンピースの中まで見えてるんだけど。
とっさに目をつむってしまった俺の肩からやわらかい感触が胸に滑っていく。
はだしのつま先が暖かくて、目を閉じても真っ白で光沢のあるすらりとした脚の残像がちらついて、俺は「うう」とか「むむ」みたいな唸り声を上げながら体を滑るそれを両手で受け止めた。
途端に体中に湧き上がる多幸感、毛穴がざざっと広がり、体の中

血が沸騰するようなそれ。

もう我慢が出来ない。

そのまま、ルミのつま先を口に含んだ。

びくびくとルミの脚全体が痙攣する。

「あぁっ…」甘い吐息まじりの声が聞こえる。

低いうなり声が自分の喉から響きはじめる。

バラバラに引き裂いて食べてしまいたいような、すべてを啜ってしまいたいような衝動と闘いながら、俺はつま先全体を甘噛みし、指の一本一本を吸い上げ、指と指の間を執拗にねぶった。

「ふぁっ…あ、」

恍惚としたルミの声に煽られる。

吸えば吸うほど、愛しさがこみ上げてきて、眩暈がする。

欲望に任せて手をのばし、ルミの柔らかく細いふくらはぎをさする。眩暈が高まる。

うん、なんで眩暈？

ルミをもっと引き寄せようとするが、力がはいらない。

あれ？

あれ？

あ…

## 1（後書き）

やっと微エロシーンに辿り着いたので投稿してみました。三日がかりです。

助言いただいた部分の修正をしました。そのまんま助言通りにするのも芸がないと思ってむりくり考えたので改良されていないかも。

## 2

誰かが側にいる気配がして、俺はそーっと目を開ける。
いつも通りの俺の部屋。だがしかし。いつもはいるはずのない父親と母親が目に入る。
俺は二人をみなかったことにして、ひらいた瞼をもう一度閉じようと――

「イッテェェェッ！」

耳が！耳がちぎれる！
真っ白な細い腕が間にも止まらぬスピードで伸びてきたかと思うと、ガっという音と共に右の耳に襲いかかった。

「ギブ！ギブ！」

枕元をタップするもギリギリと俺の右耳をひねり上げる手は止まらない。

「バカ息子、誰が初っ端から突っ走れって言った？」

人の耳を今まさにちぎろうとしているとは思えないほど、落ち着いた声がしてそのギャップがとても怖い。

「ナオ、それ以上は本当にシンの耳がちぎれる」

これは父さん。ナオというのは母さんの名前。

落ち着いてないで止めようよ。

しかし？何故に俺は母から逃げられないのでしょうか。痛い。

最後にぐりぐりと爪をたててやっとのことで指が離される。

俺は残る痛みにもだえながら体を起こそうとする、が、起き上がることが出来ない。

体中に力が入らない。

？？？

「シン、お前が昨日ルミにした『謙譲』だが――」

ぼふっと音をたてて、起き上がろうとあがいていた俺は枕に顔を埋めた。血の気が引いていく。

夢ではないのだ。俺は昨夜、実の妹の脚を嘗め回し、あまつさえその先を望んだ。

しかもそれを親に知られている。顔があげられない。

「俺たちは行為そのものを責めてるんじゃない」

父さんが言うには、魔界でも魔族各々によって、性的なタブーというものがすごく希薄で、近親、同性、異種なんでもござれという一族もいれば、頑なに一夫一婦性を守る一族もいるとのことだ。

それを聞いて俺がなぐさめられるとでも…

…すみませんすっごく救われた気分です。

ここでややこしいのが母さんの一族は前者であり父さんの一族は後者なのだ。

『盟約』によりルミには母さんの一族の特性が。

俺には父さんの一族の特性が。

じゃあなんで結婚したの、『盟約』ってなに、と問えば二人は「それに答えてやる暇は今ない」ときた。

要は「昨夜の行為」に俺がすごく恥ずかしくて抵抗があるのは当たり前だが、ルミにはあんまり抵抗がないということだ。

そして俺が今へろへろになっているのは、自分の中の力をルミにすっかり贈ったせい、もしくはルミが俺から力を吸い出しすぎたせいなのだと。

普段の行動から見るに「俺」が「捧げすぎ」だと二人は思ったのだという。

「あんたたちの間には壁がなさ過ぎるのよ、ルミに力を分けてあげられることはいいことだけど、下手すると死ぬわ」

えー。そんなこと言われてもちょっとへろへろなだけで実感湧かない。

「あんまり手間をかけるな。もう軽い前哨戦が始まっていて、俺も母さんも向こうの領地の防衛とか眷属をとりまとめるのに手一杯だ」

なんですと。

「それって二人ともルミを手伝えないってこと？」

さすがにそれはどうなんだと、思わず声が出た。

「俺たちは――」

「私たちは、ルミが負けてもいいと思ってるわ」

あれー。

結局父さんと母さんは、ルミが若すぎることを理由に、魔王候補なんてやってほしくない、というのが本音らしい。

そらそうだ。死ぬだ、殺すだ、の世界に１６歳の娘をつっこみたくない。地球の標準でも若いのに、魔界でいうとひよこもいいとこだというのが二人の見解だ。

穏便に適当に戦って、有力候補が出てきたら降伏してしまえ、というのが二人の結論だった。

どうしよう。大賛成です。

◆

結局二人はかわるがわる俺をハグして部屋から出ていった。

恥ずかしい、なんて思ってる場合ではない。おかげでおきあがれるようになったのだ。

ルミと触れ合ったのとは違う、暖かさと、こちらを心配している気持ちだけが流れ込んでくる、やさしいハグだった。

うん。まあそれはそれとして１７歳男子としては恥ずかしいですが。

しっかし、状況が変わったんだろうが、なんだろうが今まで培ってきた常識が、俺の邪魔をする。

なんと二日間も学校を休んでしまったのだ。

俺にとっては大変重要なことである。

だってどうする？学校中の男がルミにべたべた触っていたら。

時刻は午後二時。まだまだ最終授業に滑り込みつつ、帰宅するルミを護衛できる。

家から近いとはいえ、通学路は危険がいっぱいだ。主に俺の頭の中で。

俺は足取りがしっかりしていることを確認しつつ、ベッドから立ち上がった。

制服を今から着込むのはダルいが――

「はい失礼しますよ」

はずんだ声がして、父さんと母さんの次に、ノックもせずに俺の部屋に入り込んできたのはベルだった。

いやベルさん？

ベルさん＝ベル？はなんだろう？黒いＴシャツに同色のスラックスを身につけていて、なんだか準備万端だ、

何の準備？

「わたくしと部下がこれから戦闘の心得をご指導させていただきます。名誉です。ありがとうございます」

嬉しそうにそう言いながらベルはすたすたと俺に近づいてくると、両手で俺の手を掴んだ。

え？え？

途端に音も立てずに真っ黒な闇が繋いだ手の間から吹きあがる。

おい？

闇は見る間に体積を増し、俺とベルさんを包み込む。

真っ黒な気流のようなものが俺たち二人を包み込み、視界は急速に全て真っ暗。

ベルさんの姿は全身全て視認出来るのに、前も後ろも天井も床もただの暗闇になる。

なにこれ？

足はちゃんと地面についている感触があるのに、平衡感覚が狂っていく。

ベルさんにそっと手を離され、俺はよろめいて手と膝をついた。

膝下にも地面はある。

しかしそれは決して俺の部屋の床ではない。土でもない。暖かくも冷たくもない。

「ここは狭間（はざま）です。皆様これを使って地球と魔界、そのほか異世界への移動を行います」

空間が認識できない気持ち悪さのせいで、俺はついてしまった膝と自分の手から目を離せない。
ベルの声が上から降ってきているという認識は出来る。
「兄貴とキリエさんは俺をこんなところに放り込まなかったぞ」
ためしに発した声が震えていなかったことに俺は少し安心した。
「経由はされておりますが、ドラクルのお嬢様は空間制御に長けておられるので、瞬間だったのでしょう。兄上様だけの助力ならば、体感にしてわずかな時間、お歩きになる機会があったかもしれません」
「ドラクルのお嬢様ってのが誰をさしてるかよくわかんないけど、これはちょっと気持ち悪い。戻せ」
吐くんじゃね？これ？酔うよ？
「わたくしめにご用意できる場所はここしかありません。シンゼラート様の特訓を魔界で行なえば、いらぬ詮索を招きますし、地球のあの結界の中では物が壊れます」
今度は右手の俺のすぐ側に移動したのか、ベルさんの声は右側から聞こえる。
「ここから出る方法は大変簡単ですが、今説明いたしますと、坊ちゃまはすぐに戻ってしまいますでしょうから、後回しにさせていただきます」

ふざけんな。

突然「オオーン」という軽い遠吠えがベルさんのいる場所から発せられた。

ああ。やっぱりベルさん＝ベルなんだ。ベルの声だよ。っていうかベルさん犬？

そして遠吠えに対応するように、ゆらゆらと人影が二つ現れ、それをみてしまった俺は言葉を失った。

◆

「シンゼラート様、目を瞑られても困るのですが」

うるせえベル。じゃあはやくあれを消せ。

「よろしくお願いします」「お願いします」

声もかわいいじゃねーか。なんだアレ。

目を瞑った理由は現れた二人？にある。

一瞬認識したが、どう見ても全裸な女の子？二人？をとてもじゃないが正視できなかったのだ。

しかしショックのおかげか、空間認識がすすんだ。女の子二人が同じ高さにいるおかげで、自分のいる点と二人のいる位置を結ぶと三点になり、「地面」があるという感覚が掴めたのだ。

おそるおそる目をあけた俺はしかしまたすぐさま顔を伏せた。
状況は何も変わらない。全裸？な女の子？が二人？目の前に。
全裸というかなんだ？中学生くらい？の犬耳と尻尾をつけた女の子が二人。

なるべく上をみないように、顔を伏せたまま、俺は二人の足を見る。
うん。どう見ても足は動物。というか下半身はびっしり動物の毛で覆われている。つま先には爪がある。

少し目線をあげれば両脇におろされている腕もすごく動物っぽい。肘まで毛に覆われた腕の先は人間の手なんだか動物の指だかが判別しがたい。
動物よりは指が長いが人間としては短い？ような？
一番の問題、顔を伏せざるを得ないのはむき出しの毛が少ない上半身だ。
人間の女性としては小さい、が、確かに存在を誇示するアレが――

Bカップぐらいか。

いやいやいやいや。顔に血が上ってきた。

「うーん時間がないので始めるほかありません。セネ、エル、坊ちゃまをとりあえず半殺しにしてください」

のほほんとしたベルの声がして、女の子二人が息を呑む気配がした。
なんつー物騒な。

「セオベルジュさま??坊ちゃまはまだ17歳と伺っています！」
「いいんですか？」

どういうことだろう。二人目の「いいんですか？」にものっすごい期待感が籠もっているのは。

「できるならば、です。何も教わってはおられませんが、カルーベルのお子様ですから」

ベルの声が少し遠ざかった。おいおいなんだそのちょっと離れたところにさがっていく気配は！
そして女の子の一人がすすっとすり足で近づいてくるのがわかった俺は、思わず顔を上げ――

やっぱりおっぱいがむき出しなことを確認して下を向いてしまい、「それ」を避け切れなかった。

ドスッという衝撃が無防備な腹部に走る。

「オエっ」というカエルが潰されたかのような声を上げ俺は地面についていた腕で腹を抱えた。

女の子がローキックを俺に見舞ったのだ。

俺が腹を庇うしぐさに反応して、体を一瞬ひいたものの、再び構える仕草ををして女の子は言い放った。

「あーん、いたいけな少年を嬲るなんて……興奮してよだれが……」

イタイケナショウネン…誰がやねん…

くっそヤベえ。かわいい女の子が変態だ。

こうなったら乳が揺れていようがなんだろうが、せめて防御しないと――

「ハッ！」

裂帛の気合とともに目の前の少女が跳躍し、釣られて見上げた俺はまたもや目を疑った。

モフモフなはずの下半身は開脚されており、なんというかそれは、

――パンツはいてないじゃん――

しっかり固まってしまった俺の肩口に今度は踵落（かかと）としが決まった瞬間だった。

## 3（前書き）

※流血表現があります。

## 3

痛てぇ。

つーかなんだ。反則だろう。あのジャンプ力。あとパンツはけ。

俺は右手で腹を押さえ、左手で肩を庇いながらごろごろのた打ち回った。

「セネ！」

もう一人の女の子が咎めるような口調で、叫ぶ。

ベルはどこにいるのか、何も言わない。

シュッっと風を切る音がした瞬間、首をすくめた俺の頭上に、ドゴっと地面を鈍く打つ音がする。

どうも間一髪で殴打を避けることができたらしい。

攻撃者から少しでも離れようと、そのまま真横に体を回転させる。

あー目が回るよー。

「さすが坊ちゃま。頑丈ですわ！」

いや今君が殴ったの地面だし。

セネと呼ばれた娘はなんだかやる気まんまんだ。何故にそんなにテンション高いの。

やられ放題は気に食わねえ。しっかし、どうするよ。

俺はふらふらしながら立ち上がった。距離はとれたようだ。

やっと正面から対峙したものの――

トントンと両足を揃えて跳ぶな。乳が揺れてるじゃねーか。

姿を捉えつつ、やはりまっすぐには見られない。俺はやりきれない思いで叫んだ。

「ベル！ちょっとタンマ！」

「なんでしょうシンゼラート様」

ちっ。だいぶ離れたとこにいるな。

「俺は、女の子を、殴れません」

暗闇の中俺の情けない台詞が走る。

少し間があってベルから応えがあった。

「大丈夫です。獣魔なんで女の子とかそういうものじゃありません」

だーーーってめえ！察しろ！判れ！大体じゃあなんで二人とも俺に台詞に反応してはにかんでるんだ！！

さっきまで殴りかかってきたセネなんか顔まで押さえて真っ赤じゃねーか！

「魔界での公子と呼ばれる方々においては、多分に地球の貴族趣味と似通い、衣装も華美ですが、地球上の意味とは身にまとうものの感覚が違います。またその眷属はシンゼラート様におかれましては、大変破廉恥な姿をしているものも多く、今すぐ慣れていただかなくては」

あっそ。俺が何を言いたいのかはわかってるってことか。オーケー後でぶっ殺す。

むしろ散歩に連れて行く。引きずり回す。川原をとってこい往復50分だ。

「セオベルジュ様！ひょっとして可能ならば、坊ちゃまを犯してもいいのでしょうか！？」

セネちゃん？もしもし？小声で言ってるつもりだろうけど、ベルより俺のほうが君に近いよ？

何言っちゃってんの？怖いんだけど？

うん？それに呼応してエルって女の子がずいって感じで前に出てきた。

「それならばわたくしの方が――」

おっとアクションないせいで、この場で唯一のまともな「人格」を保っていた方のわんこ少女が！

そうかこの娘も変態か。

もう、なんと言えばいいのか。

「うん？どうでしょうね？そのほうがシンゼラート様が本気で抵抗してくださるかもしれませんが。喜ばれると戦闘訓練になりません」

くそ！アホ犬！後で覚えてろ！誰が喜ぶんだ誰が――

俺は正面から二人のわんこ少女たちを見据えた。

下半身は完全に動物だが、顔と上半身（腕と耳を除く）は完全に女の子だ。

しかも目はきらきら期待（なのか？）に輝き、頬をうっすらと赤く染める様子は、顔立ちの整い方からして美少女と言っても過言ではない。

獣耳と尻尾をぴこぴこさせる美少女というカテゴリがあるのならば。

そして惜しげもなく晒されている推定Bが合計四つ！

喜ぶ人も…いるかもしれない…

◆

字義通り、闇雲に俺は走っていた。

なんせ視界は全部暗闇だ。自分が進みたい方向に進めているのかどうかも判別が付かない。

全裸（半裸？）の女の子と殴りあうくらいなら、逃げた方がましだと思って走り出したが甘かったかもしれない。

体感で五分も走ったろうか。マラソンなどでなくほぼ全速力で突っ走った俺は、よろよろと歩調を緩めた。とりあえずあの場は逃げ出せた――のか？

「なかなかです！」

すぐ耳元で囁かれた声に飛び上がる。

真横にベルがいた。

「女の子扱いをして獣魔の反応を鈍らせ、仲たがいをさせてその場を逃げ出すとは」

とりあえず何も考えずにベルに向かって蹴りを放った。ひょいと上半身をそらされ空振る。

そのまま体を軸に続けて後ろ回し蹴りも放った。今度は掠(かす)る。

「わふっ」

「よけるな。死ね」

「何故に」

両手を前に着きそれを軸に左足で足払いをかける。

また躱(かわ)された。

くそ。素早い。

「わたくしは坊ちゃまに手を上げられないので訓練には不向きです」

だいぶ距離をとられた。

「本気になってくださるのは獣魔相手にしていただけませんか」

けっ。しゃにむに詰め寄ろうとするが、簡単に逃げられる。

「仕方ありませんね」

ため息をつきながらベルはものすごい速さで走り去っていき。そして姿を消した。

え？なんか今斜め上に走っていったような？

え？俺ここに置き去り？

真っ暗闇の中、棒立ちになる俺。

あたりを見回すがなにも見えない。

どういう作用なのかわからないが、自分の手はみえる。あ、俺裸足だわ。

というかTシャツにハーフパンツという部屋着のまんまだわ。

なんせ色の境目がないせいで、平衡感覚が不安にさいなまれるが先ほどよりは慣れてきた。

歩いてみるか。

出口を探さないとどうしようもない。

心を決めたその時だった。

「こちらでございます」

またか。残念なことに再び姿を現したのはベルだった。
左右にセネとエルを従え、さらに小脇に人を抱えている。
距離にして、十歩たらず。

ベルが抱えていた人間を降ろして立たせる。

セネやエルと身長に差のないその人影は、見慣れた制服を身にまとっていた。
人影が声を発する。

「シン兄(に)ぃ…」

ルミだ。
思わず「おい」と声を出して駆け寄ろうとした俺をわんこ少女の一人が制止した。

「動かないでください」

彼女の右前肢の鋭い爪がルミの頬に食い込んだ。
おそらくもう片方の腕でルミの両腕を後ろに拘束しているのだろう。こちらからは見えない。

俺は踏み込もうとした足を止め、二人を睨みつける。

「本気になっていただくためにご協力いただいたのですわ」

もう一人のわんこ少女、セネだったか、が、何故か制服のスカートを捲り上げるように掴む。
やめろよ、おい。

ルミが嫌そうに身じろぐのを見て、さすがに俺も覚悟を決めた。
「わかった。真面目に殴り合いでもなんでもする。だからルミを離せ」
動揺したあまりになんだか早口になった。
ばかばかしいがやってやる。後悔すんなよ。
「真面目な殴り合いでは駄目なんです。本気でこの獣魔二人をなぶり殺してもらわなくてはなりません」
気がつけばルミを降ろしたベルが相当後ろに距離を取っていた。
また物騒なこと言いやがって。
ほんと後で覚えてろ。
「セネ、エル、遠慮はいりません」
ベルの無責任な命令がかかる。
はいっ！という元気な返事と共に、何故かセネが掴んでいたスカートを引っ張る。
ブツっとスカートのホックが千切れる音がして、ルミからスカートが剥がされた。
下着だけの下半身が露（あらわ）になり、ルミがまたいやいやをするように体を動かす。
真っ暗な闇をバックにルミの白い脚がなまめかしい。
セネが続けてルミの上半身を覆うセーラーに手をかけて――

「いいかげんにしろっ！」

たまらずに俺は怒鳴っていた。

あまりにも声を振り絞ったので喉が熱い。

頭に血が上って目がちかちかする。

ギリギリとおかしな音がさっきからしていたのは自分の歯軋りだ。

俺の声に反応してエルとセネがびくりと体を震わせる。

セネは一瞬ベルの方を見やり、そして俺を見つめ、セーラーにかけていた手をひっこめると今度はルミのフトモモあたりに手を移動させた。

そしてその爪が、グサリ、と、ルミの脚をえぐり、血が噴出し、下へ、膝を伝い、ふくらはぎへと――

同時にエルがルミの頬から爪を滑らせ、セーラー服の上からかきむしるようにルミの上半身を引き裂さく。

「――」

声にならない悲鳴を、ルミがあげ――

俺は、吼えた。

◆

どうやって移動したのかわからない。

一瞬にして三人の傍らに降り立った俺は、無造作に腕を振りぬいて、まずセネをふっとばした。

3メートルほどの距離を半円を描いて彼女は飛びそのまま地面に叩きつけられ、声も出さずに昏倒する。

ひたすら凶暴な衝動に身を任せた行動だった。

次に、ルミの拘束をといて構えたエルに拳を突き出す。

後ろに跳び退ろうとするのがわかったので、逃がすまいと、固めた拳をほどき、そのまま彼女をつかもうとした。

何故か俺の爪は異様に鋭く伸びており、そのままエルのわき腹を抉(えぐ)る

「ああっ」

エルは、上半身から血を流し、悲鳴を上げながら、わずかに後退し、その場に踏みとどまった。

拘束がとけたために、くたっと地面に崩れようとするルミを片手で受け止めた俺に、今度は蹴りを放ってくる。

俺は片手にルミを抱いたまま、その蹴りをもう一方の手で受け止め、足先を掴んだ。

そしてその弱さを嘲笑(あざわら)いながら、握りつぶしかねない強さでひね

った。

「ギャインっ！」

蹴られた犬のような悲鳴をあげて、逆さ吊り状態になったエルがもがく。

邪魔なので、振り子のように反動をつけてそれを投げる。

エルは離れた場所に腹を打ち付けるようにして落ち、動かなくなった。

片手に抱いていたルミをそっと地面に寝かせる。

背後からの気配に振り返れば、倒れていたはずのセネだった。

俺は膝をついたまま、振り向きざまに彼女の喉笛を片手でつかんだ。

――ヨワイ――チイサナイキモノ――

掴んだまま立ち上がると、セネは抵抗をあきらめ、ぐったりと手足を垂らした。

ひゅうひゅうと小さく呼吸をするその細い喉を握りつぶすかどうかを思案し、心の中の、

――オカシテ――ソノアトクッテシマエバイイ――

という言葉に耳を傾ける。

まるで自分が二人いるようだ。
早く「これ」を放り出してルミの様子をみたい自分と、すべてを壊してしまいたい、破壊衝動に身を任せたい自分がいる。
――コレハサッキ――ルミヲキズツケタ――
それもそうだ。
喉笛にかけた手をそのままに、もう一方の手でセネの右足を切り裂く。ルミが傷つけられたのと同じ場所を。
びくりと声も出さずにセネが痙攣する。これはあと少しで死ぬな。
なんとなく気が向かなくて、喉から手を離す。
ドサリ、と音を立てて、セネが地面に落ちた。
ルミが気にかかる。地面でもがくセネをそのままに、俺はもう一度ルミに向き直った。
側にしゃがみこむ。
ルミの目は虚ろで何も映していない。
「シン兄(に)ぃ――」
うわごとのように俺を呼ぶ。よくよく覗き込んで違和感に気がつく。
これはルミではない。そっくりだがルミの匂いがしない。
騙されたわけか。

急速に気持ちが萎む。嫌悪感と、後悔が湧き上がった。
それなら、今俺がしたことは――

「お見事です」

離れた場所から声がかかる。

うんざりした気分で見回せばやっぱりベルだった。

聞きたくもないが妹にそっくりなこれが気にかかる。仕方なしに俺は尋ねた。

「これなに？」

「ナオミ様から「寄木細工」をお借りしてまいりました」

「細工ってことは生き物じゃないのか」

「ある意味生きておりますが、限られた生ですね。急ぎましたので、そろそろ――」

ベルが説明を始めたそばから、「ルミ」だったものはぽろぽろと分解していった。

偽者だとはわかっていても、大事なものが、その姿を崩していくことはたとえようもなく気を滅入らせた。

見る間に小さな破片の山になってしまったそれを、手にすくってみる。

それは小さく小さく刻まれた木の葉や、枝、蔓といった植物だった。

「寄木細工ね。ベル、ちょっとお前こっちに来い」

とりあえずベルをタコ殴りにしようと思う。いやする。決めた。
しかしベルはそばには来ず、言葉を継いだ。

「坊ちゃま。今日は偽者でしたが――明日は偽者ではありません」

## 3（後書き）

予定は十行のはずだった狭間での特訓でした。

## 4（前書き）

若干の日程のずれがあります。筆者の残念な勘違い（6月には31日が存在する）とスピード不足（30日のうちに投稿することを失敗）により本当ならば、実際の7月1日から本戦だったのですが。。。

## 4

「坊ちゃま。今日は偽者でしたが――明日は偽者ではありません」

言われた言葉を噛み締める。

そうだ。ルミは明日から魔王候補として戦う。

いまだにばかばかしい夢を見てるんじゃないか、という思いもぬぐえないが、この二日間の奇妙奇天烈な現象が、俺の認識を後押しする。

「心得違いがあれば、あの「寄木細工」はサルミスラ様の明日の姿です」

ベルの言う「心得」とはなんだろう。

俺はルミを守るつもりだ。その思いが嘘だなんて誰にも言わせない。

俺は吐き出すように言った。

「父さんと、母さんは、降参してもいいって言ったぞ」

「ある程度の力を示さねばそもそも会話が成り立ちません」

ベルがばっさりと俺の甘さを切り捨てる。

俺は唇を噛んだ。

それでは、とお辞儀をしたベルはいつのまにか左右にセネとエルを抱えている。

「その娘(こ)たち、大丈夫なのか」

何言ってるんだ。傷つけたのは俺なのに。殺そうとしたのに。

「丈夫でございますし、生きております。しばらくお屋敷に置かせていただきますので、お時間がありましたら見舞ってやってください」

ここを出るには、行きたい所を念じて歩けばよろしいのです。

そう言いながらベルはすたすた歩いていき、姿を消した。

◆

なんつーアバウトな。

暗闇にひとり取り残された俺は少し考え込む。なにか考えながら歩くのは得意じゃない。

今、俺はどこへ行きたいんだろう。

決まってる。

ルミの側へ。

ぼろぼろに崩れていくんじゃない、生きている生身のルミのそばへ。

俺は意思をこめて足を踏み出し、何歩か歩く。

徐々に、暗闇が薄くなっていくのがわかる。

そうして俺は唐突に光のある場所にと辿り着いた。

◆

「いやぁぁぁぁぁぁっっっ」

たいして広くもない風呂場に絶叫が響く。

痛くも痒くもない適温な温水がバシャバシャ俺に浴びせかけられる。

片手でシャワーヘッドを振り回しながら片手で胸部を庇っているのはルミだった。

どうやら俺は自宅の風呂に躍り出てしまったようだ。

何故かといえば多分そこにルミがいたから、なのか。

俺は状況を吟味することも忘れて、ただただ無事なルミを見つめてしまった。

全裸の妹を見つめる俺には、ヨコシマな気持ちなんてかけらもない。ないったらない。

ただ、相変わらず白いな、とか、成長してないな、なんて感慨が湧いただけだ。

「バカバカバカっ！シン兄(に)ぃのバカぁーっ！」

ルミは出しっぱなしになった湯を止めもせずに風呂場から飛び出していった。

力一杯風呂の戸が閉められる。

昨日の夜俺に足をなめさせたのはどこのどいつだ。

えらく夜と昼で性格が違う。

ん？夜と昼で性格が違う？――ん？

まあでもなんだ。ルミは無事だ。そのまんまだ。

俺はさっきのぼろぼろと崩れていくルミのイメージを頭から振り払った。

びしょびしょになったついでに俺も昨日の朝から浴びたかったシャワーを浴びよう。

濡れた衣服を自分から剥ごうとして、驚いた。

腕から先がえらく筋肉質になっていてしかも爪が出ている。

これ戻らないのか？

エルやセネのように毛皮こそまとっていないが、これは相当違和感がある。

よくよくみれば足先もだ。筋や腱が盛り上がって、あり得ない感じの外見だ。

「おいおいおい……」

これ箸が持てないんじゃ？

などと思い始めた途端ぞくぞくと悪寒が走って、ゆっくりとではあるが手足が通常の形を取り戻し始めた。

ふむ。とりあえず自分を引っ掻かないように服を脱ぎ捨て、脱衣所に放り込む。

体をあちこち調べるが、わんこ少女たちからのダメージは残っていないようだ。

ざっと体を洗って風呂場を出て、俺はタオルを巻いたまま自分の部屋にもどった。

◆

長い時間あの暗闇にいたようでそうでもなかったようだ。

まだ四時。日差しは時計が示す時刻を裏切ってぎらぎらと輝いていた。

ここでぐだぐだしても仕方ない。

今日の夜からのことも考えて、一番履きなれたジーンズと動きやすいTシャツに着替える。

俺は部屋を出て廊下をはさんだすぐ向かいの扉をノックした。

「ルミ」

返事はない。

気配はする。

ひょっとして怒ってるのか。風呂場に飛び込まれれば怒るか。年頃だし。

「開けるぞ」

「や」

反射的な返事が返ってくる。

困った。

「悪かった」

謝りながら扉に額をつける。
お前が心配だったから、とか、無事な姿がみたかった、だとか。
そんなのあの場であったことを知らないルミに言っても仕方ない。

扉の向こうから緊張が伝わってくる。
俺は言葉を重ねた。

「話が、したい」

顔がみたい。できれば抱きしめてそのぬくもりを味わって、生きてるお前を実感したい。
そして血を流して崩れ去ったあれを早く頭の中から消してしまいたい。

でもそんなことは言えない。

変態くさい。

昨晩という前科もある。

「なんで」

声が近づいた。

すぐ扉の向こうにルミがいるのがわかる。
扉という板一枚挟んで俺とルミは向き合っている。
「なんでって、今日ってか十二時からだろ。作戦とか」
俺は何言ってるんだろう。
扉ごしではなにも伝わらない。匂いも、温度もわからない。
思ってもないことを言って、ルミの興味をひきたいだけだ。
「うそつき。さっさと負ければいいと思ってるくせに」
何故だろう。扉の向こうで、ルミが泣いているのがわかる。
頑張り屋で、負けず嫌いで、小さな体でいつだって一生懸命な俺の妹。
俺のことをわかりすぎるほどわかっている。
いつだって無理をさせないように庇ってきた俺の行動方針をルミが見抜けないはずがないのだ。
俺は、何を言えばいいのかわからずに、固まった。
まずい。
何か言って誤魔化さねば、ルミの言ったことが正しいと認めたようなもんだ。
しかし、悲しいことに口げんかで勝ったことは一度もない。
というか手をあげたこともないので、ルミ対俺の喧嘩は常にルミの勝利という結果しかもたらさないのだ。

「いいもん。夜になったらシン兄(に)ぃの力なんか全部吸い取って、一人であっち行くんだもん」

待て。

内容につっこむべきなのか、泣いてる事をどうにかするべきなのか、さっきの失言をフォローするべきなのか。

勘弁してくれ。俺は同時にいくつものことを考えると頭がパンクしてしまう人なのだ。

うん。というかパンクした。

考えが追いつかなくなった俺がしたのは、無理やり扉を引き開けることだった。

扉にもたれていたのだろう。「あっ」と言いながら手前によろめくルミを受け止める。

俺は昨夕、ルミに触れたらどうなったかってことをすっかり忘れていた。

はからずも抱き止めたルミは、まだバスタオル一枚のままだった。触れたそばから背筋がぞくぞくして、ぼんやりと昨夕の多幸感がよみがえる。

ほわほわと暖かい気持ちが湧き上がってきて、切ない。

「ルミ……」

抱きとめる寸前に見てしまった。目を真っ赤にしている妹。俺か。俺が泣かせたのか。

ごめんな。ほんと自分を殴りたい。

表情はみえなくなったが、白い肩はまだ震えている。

すんすんとすすりないているルミが、可哀そうで可愛くて愛しくて。

俺はそっと、まだしめっている髪に口づけた。

本当はおでこにしたかったが、身長差でどうにもならない。

ルミはまだ泣いているのに、何故か幸せな気持ちがふくれあがってくる。これはいったいなんなんだろう。

暗闇の中と同じく、急速な自分の感情の変化にとまどう俺が二つに分離していく。

両腕に力をこめて、この白く細い体を自分の内に閉じ込めて、流す涙もすすりたい、というド変態な俺と、

このままでは昨晩の二の舞になり、今日ルミを守ることが不可能なことになってはまずい、という俺。

どちらも俺だ。

これはなんだ。

俺の過剰な愛情表現＝頭にチュー、に照れたのか、それとも怒っ

たのか、ルミの体温が上昇していく。

なんだかまずい。愛しいという気持ちが、あとからあとから、いくらでも――

温かい血が通った体から、俺は、機械人形のようにぎくしゃくとまず右腕を引き剥がし、意思をこめて左腕を引き剥がす。

はたからみればロボットダンスだ。

「服を着たら呼んでくれ」

磁石のように引き寄せられながらも、俺はゆっくりゆっくりと後ずさり、なんだか驚いた顔をしているルミに声をかけ、自分で開けた扉を静かに閉じた。

頑張った。俺は頑張った。

何を？

## 4（後書き）

きゃーのびたさんのえっちーがやりたくって。
こんな瑣末なシーン書いてるばあいじゃないんですが。

主人公が若干こどもっぽい気がします。高3でなく中2なような。
誰か読んでくれてますでしょうか。助言を。助言をぷりーず。

## 5（前書き）

どんどん予定がずれこんでいくよ

## 5

部屋に戻った俺は時計を睨みつけている。
刻々と時は過ぎていく。

――呼べっていったのに。

もう十回は着替えられるくらいの時間が経っている。多分。
日が暮れてしまえば、ルミがやることなんてわかっている。
あいつは有言実行派だ。

本当に俺を昨晩みたいにへろへろにして自分ひとりで出て行くだろう。

気持ちがイライラして高ぶる。
えらく簡単に自分の体に変化が起きそうな気配だ。

今までだって興奮することはあったのに。
手や足が変わることはなかった。

気になる。でも誰も教えてはくれない。

家の中にいるのは俺とルミだけだ。
父さんも母さんもばあちゃんズもベルも大おばあちゃんもいやしない。
どうなってるのかわからないが、本気で俺ら二人だけにやらせるつもりなんだろう。

もしくはさっさと負けて帰ってこいってことなのか。

そっちのほうがありそうだな。

だとすれば俺の役割はなんだ。

大体誰と戦うのかもわからないとか。いまどきジャンプでもそんな展開じゃねえよ。

と、くさくさした考えを弄んでいた俺は、突然、鳥肌がたつような気配を覚えた。

――ッ

悲鳴が聞こえる。

ルミの部屋だ。

◆

自分の部屋の扉を蹴りあけ、ルミの部屋の扉を引きちぎるようにして踊りこんだ俺の目に映ったのは――

狐だった。

正確に言うと子犬サイズの仔狐だ。

目をしばたたかせるが光景はかわらない。ルミの部屋の真ん中に狐が出現している。

仔狐がこちらを見上げる。そして首をかしげた。

「なん「かわいいーーー」

俺がなにか言おうとするのをさえぎって、ルミが叫んだ。

仔狐に向かって両腕を差し出す。どうするつもりだ。どうみてもあやしいだろう。

しかもなんだ、その無防備なふわふわした白いTシャツとキュロットは。

これからどこで、何すると思ってるんだ。

俺はずかずかと狐とルミの間に割ってはいろうと――

「やあ、ほめてくれてありがとう」

俺は二人（一匹と一人）の間に踏み込もうとする形のまま固まった。

「こっちでの「握手」はしってるけど、ちょっとこのからだでは難しい。「お辞儀」で許してね」

仔狐は前足を揃え深々と頭を下げる。

ルミがそれをみて声もなく身もだえする。どうしたんだおまえ。

「託狐(ことづけぎつね)のテウメッサだよ。このたびはカルーベルのお子様に言伝を持ってきました」

どうみてもケモノな口からすらすらと日本語が放たれる。変だ。

鼻やひげがぴくぴくしている様も、大きな耳も偽物にはみえない。しいていえばちょっと毛並みが赤い？か？

胸は背の色と対照的に真っ白で、ふわふわしている。

「喋る狐」に、全然対応しきれず、仁王立ちで固まった俺を、ベッドに横座りしているルミが、服の端をつまんで、ちょいちょいと手で引いた。

つられるように隣に座り込む。

「もう一人はいないんだね。どこにいるの？場所がわからない」

尻尾を上下にぽすんぽすんと振り立てながら仔狐が言う。

「わかんない。でも伝えるよ？それじゃだめ？」

ルミがかわいい声で平然と言葉を返す。

駄目だ。俺だけが毎回ついていけてない。

ルミの言葉に、仔狐が思案するように前足でひげをなでた。

「ううん。一人でもよかったし。じゃあ伝えるね――」

気を取り直したかのように仔狐が話し出した時だった。

またちりちりと体の皮膚があわ立つような感覚がしたかと思うと、部屋の空中に黒い気流が渦巻きはじめる。

俺はとっさに立ち上がり、ルミを背後に身構えた。

音もなく見る間にぽっかりと黒い穴が空中に浮かび、ばさっばさっと羽ばたく音がする。

今度は、鴉が、現れた。

鴉は飛び込んできたかと思うと、突然もがくように羽ばたきながら、「グワッ」っと叫んでうまく飛べずに落ちた。

ギラギラと光沢をおびた嘴（くちばし）に、するどそうな鉤爪、普通の鴉よりも三倍は大きな体。

どうみても仔狐よりは危険なそいつに、俺は身構えを解かずに対峙する。

鴉はバシッと翼を床に打ちつけながら、何か罵るように早口に口走り、そして、ハッと何かに気がついたように周りを見渡す。

俺やルミ、仔狐が目に入ったようだ。

突然、鴉は身じろぎ、頭をこちらに向けて立ち位置を直し、翼の先を湾曲させて嘴（くちばし）の側までもって行き、
「コホン」と咳払いをした。
それは、えらくコミカルな動作で、どうみても着地の失敗を誤魔化すような仕草だった。
あっけにとられながら、俺は、鴉が咳払いしたことが、何故か狐が話すことよりショックが少ないなどと考えつつ、脱力してそのまま、また、ルミの横に腰を下ろす。敵愾心（てきがいしん）もどっかへ行ってしまった。
どうせこいつも喋るんだろう、と思いながら。

◆

「つまりどっちも「決闘」の申し込みなんだ」
ルミののんきな物言いを、鴉と仔狐が肯定する。
鴉の名前はフギンと言うらしい。別に伝言は仕事でないが暇なので引き受けたんだそうだ。
そしてこの一匹と一羽の言伝は、それぞれ別の相手からのものであり、ここでブッキングしたと。そういうことらしい。
「問題ねーだろう、ちょうど二人いるんだ。二人がそれぞれのとこに行ってくれれば、オレもテウメッサもお仕事完了だ」
このくだけた物言いは鴉の方だ。予想どおりというかなんという

か日本語ペラペラだ。
しかしやっぱり言葉を話す狐、より言葉を話す鴉、のほうが何故かしっくりくきてしまう俺だった。
「オレはカルーベルの息子とも娘とも聞いちゃあいねー。まあ、どっちがどっちに行っても結果は一緒だろうしなー」
あんまりこいつらと話したくはなかったが、何か考え込んでいるルミの代わりに俺が口を開く。
「結果が一緒ってどういうことだ？」
「おまえらがこんな赤子みたいな年齢だなんて、先方さんも知らねーだろうが、まあ、要はペロリと食われちまうだろうってことさ」
鴉は体を軽くゆすってクオクオと変な音を立てた。ひょっとして？笑っているのか？
わかりにくい。
そしてそれ以上に気になることがある。
尋ねるべきかどうか俺は迷った。
「へぇ？知らないんだ」
考え込んでいたはずのルミが、さりげなく、鴉に水を向ける。
鴉がじっとルミを見る。
俺が気になったのもそこだった。
鴉が言葉を続ける。

「おまえらこっち生まれだろう。まだどうみてもちびっこじゃねーか。カルーベルに赤ん坊が三人もいるなんて、オレは知らなかったぞ」

「なんでわたしたちのこと知らないのに、ペロリなの？」

ルミが無邪気に尋ねる。

知らない大人に話しかける時の、ルミの技が発動しているのを俺はありありと感じた、が果たして鴉や狐に通用するのだろうか。

「そらおまえら魔力全然足りなさそうだし」

この鴉は、ルミの封印のことを知らないのか？

鴉はべらべらと話をはじめた。

いかに自分に言伝を頼んだ相手が、魔界では有名で強いか、ということ。

狐のほうが言伝を運んできた相手も噂だけは聞いていること。なんでも若いが優秀で一族から可愛がられているらしい。

俺はなんとなく勘違いしていたが、結局各家〔最年少者から数えて三人目〕まで継承権争いに参加できる、ということは、うちのようにルミが候補、と決定することではなく、同じ一族であっても魔王になりたいと望むものが重なれば、それは争う理由になるのだ。

五つの大公家と呼ばれる家同士の戦いであるが、狐と鴉に言づけた家以外は、特に一人の下に結集しているということではないらしい。

カルーベル家で有名なのはナオミ様、つまり俺らの母さんであり、まず〔最年少者から数えて三人目〕の中にナオミ様が入っていることは間違いない、との予想の元に、狐と鴉は走らされ、母さんの下に行ってから、こちらに行け、と、たらいまわしにされたらしい。

そんな話の中、気がつけば仔狐はルミの膝枕でくうくういびきをかいて寝ていた。

しかし鴉の魔界ゴシップは止まらない。ルミがうまく相槌や合いの手をいれるからだ。

話は前魔王の退位の理由にまで及び始める。

異世界にも地球のようなリゾート地をつくろうと、前魔王は戦争をふっかけ、どうも異世界の勇者にこてんぱんにのされたらしい。

前魔王の退位はそんなばかばかしい理由だったのである。

そのせいで各大公家でも、大きな力を持つ者は、前魔王の頼みと盟約により、傷つけた異世界を修復したりする、いわゆる戦争の賠償をしている最中らしく、なんとうちのばあちゃんズはこっちに駆り出されているのだ。

「おまえら自分の家のこともわかってねーのか」

呆れたように言う鴉を、ルミはただ「ふふっ」と軽く笑ってかわした。

俺？俺は狐が羨ましくてじっと睨んでいました。

## 5（後書き）

テウメッサ＝原典はギリシア神話から。
「何人たりとも捕まえることが出来ない狐」という神話上の設定から伝言狐として登場してもらいました。

フギン＝原典は北欧神話から。
ｗｉｋｉにもあるのですが、神様の言うことを聞かずにふらふらしているおしゃべりなカラスというイメージから登場してもらいました。

## 6（前書き）

前話とくっつけるべきでした。
短いですがとりあえずこのまま。

## 6

「でも困ったなぁ」

へ？

ルミがその綺麗な形の眉を寄せている。

「実はフギンさんとテーちゃんが来る前に、もう今日の予定は決めちゃったんだよね」

なんですと！？

俺は驚いてルミに目をやる。

「なにーっ！？」

これは鴉だ。いちいちリアクションが大きい奴だ。翼を両側に広げている。

なんだか鴉が大げさすぎて、俺の驚きは目立たなくなってしまった。

「だから、フギンさんの言ってた、――誰だっけ？」

「翼あるものの長、クンサルダカールに連なるものの末子、六枚羽のマナナディン・バト・イユ様だなー。覚えろよ！」

覚えろとか……無理だろう。そのまま繰り返すのも危うい。

だいたいなんで横文字カタカナ苗字アリ二つ名持ちなんだ。

鬼とか悪魔でいいじゃないか。

「と、テーちゃんが言ってた……？」

「鬼神の貴公子にして、ヴェントの名手、博識であることが魔界に知れ渡っておられる、イェンス・フェーンストレム殿だなー。おまえら魔力ないうえにバカなんだなー」

バカとかそういう問題なのだろうか。

だいたい、狐の方はそんなに大げさな言い方しなかったし。

俺にはこの鴉と狐の名前すら無理なんだが…。

なんだかルミもあんまり覚える気はなさそうで、ちょっと安心した。

「そうそう、そのマナナンさんとイェンさんにちょっと相手を替わってもらって、二人がお互いに戦えばいいよ」

おおっ？

ルミはそう言ってのけると、いいアイディアとばかりに手をぱん、と打ち合わせた。

バカだと言われたことはスルーだ。

「なにバカなこと言ってんだ！しかも名前まったく合ってねーし。…そんなの無理に決まってんだろう？テウメッサ！起きろ！」

鴉がばさばさ翼をはためかせて暴れ始める。

うぜー。

しかし狐が起きることには賛成してやろう。早くそこをどけ。

「だってわたしたち先に予定決めちゃったもん。すっごく有名なそ

の人たちの今日を無駄にしちゃダメでしょう？」

続けて、テーちゃん起きて、とやさしく狐の背を撫でながらルミが言う。

狐が身じろぎをして、くあ、とあくびをしながら起き上がった。

いい気なもんだ。

「テーちゃんの伝言主さんは、場所はおまかせって言ってたし、フギンさんの伝言主さんは、イミポフってとこをを指定してたからちょうどいいよ」

順番とか気にしそうな人たちでもないし。とルミは誰に言うでもなく小声で続けた。

「誰が先に申し込んできたんだ？あ？」

鴉がちんぴらだ。

なにか興奮して狐の尻尾を突っつこうとして嫌がられている。

なんだかな。こういうところは鴉っぽいな。

ついでのように俺にもガンをつけてくるが、やっぱり展開についていけない俺は黙っていた。

「そんなの決まってるじゃない。ここにいるお兄ちゃんとわたしでどっちが強いか決めないと！」

えーっと……。

聞いてないし。

ルミは平然としている。

「なるほど。それもそうなの」

起き上がったばかりの狐が、納得したように会話に割り込んできた。

鴉はショックを隠せない様子で、下を向き、それから上を向き、その場をぐるぐると回り始める。

「カルーベルは結束があるし、いつも女性が強いから、あなたが出るのかと思ったけど、そんなにこっちの人狼（ジンロウ）と魔力の質に差がないの。むしろ似てるの。あなたも魔王になりたいんだね？」

狐がルミから俺の方を向いて質問をしてくるが、俺はぽかーんとしていた。

俺と？ルミが？なんで？

もう決めたじゃん？

じんろう？魔王？

誰がよ？

「なりたくないやつがいるわけねーもんな。そうか。じゃあオレはフェーンストレム家に飛ぶとすっか。ほんといろんなとこに飛ぶ日だなー」

鴉が独り合点（ひとりがてん）している。

うん。こいつはほっとくとして。

俺は再度ルミを見やる。

人差し指をたてかわいく唇にあてて、ルミもこちらを見ている。
瞳がいたずらっ子のように輝いている。
何も言うなってことか……。
学校で俺だけが、ルミを妖精呼ばわりしてこなかった。
が、ルミと出会ってまもないこいつの同級生は、何か俺のわからないルミに気づいてたってことなんだろうか。
今のルミの様子は、まさにいたずら好きな妖精だ。
ティンカーベルというよりパックだが。
「じゃあオレはいくぜ！しっかし最初からすごい対戦になっちまったなー」
鴉がまたクオクオ言ってる。
だからそれは笑ってるつもりなのかと―。
人の話を聞かない鴉は、よちよちと部屋の壁まで近づいて、壁をこんこん嘴（くちばし）で、突っついた。
壁に黒い霧が渦を巻き始める。
どうもこの黒い出入り口が開き始めると、鳥肌がたつんだが……。
ルミと狐と腕をさする俺に、
またなー、と能天気な声を残し、鴉は黒くなった壁の中に姿を消

した。
鴉を飲み込んだ穴は瞬時にして閉じる。
騒がしい生き物が去った部屋に沈黙が落ちた。
鴉が、またな、と挨拶をしたことに、心の中で「二度と来るな」と返して、俺はもう一匹の訪問者のほうに視線を戻す。
狐もこちらをみている。
そういうえば魔王になりたいのか、と問われたんだったけか。
どうすっかね。
「テウメッサは、人が指を口にあてる意味をしってるの」
俺をみながら、ぽつりと狐がもらす。もれなく尻尾の動作つきで。
「でも面白いからマナナディンのところへ行くの」
言いたいことだけを言ってこちらの返事も聞かず、その場で狐はとんぼをきった。ぱっと姿が消える。
えらく鮮やかだ。暗闇が湧く気配はわずかで、小さく、ベルや鴉のように大げさでない。
子供のような物言いと、その動作がちぐはぐで、俺はすこしめんくらった。
なにはともあれ、部屋には俺とルミの二人きりである。

日没は間近だ。しかし、ひょっとしてひょっとすると、今日の戦いは免れたのでは。

先程の、人差し指の動作も気になっていた俺は、ルミに声をかける。

「ルミ――」

「はぁ……。狐のテーちゃん、かわいかったねぇ……」

ルミが、心からさみしそうに言った台詞に、

脱力した俺は言葉を失った。

## 6（後書き）

場面的にここで切ります。

※　パック＝「真夏の夜の夢」という戯曲に出てくるいたずら妖精です。

## 7

俺とルミは魔界に来ていた。
相変わらずのデタラメな空のピンクに、時刻を示さない巨大な月モドキ。
ただし空気は素晴らしく澄んで、都会では味わえない自然の香気に満ちている。

俺たちがいるのは、小さな池のようなもののほとりで、水面は何故か赤い。
気味の悪い色だ。

たまに気泡が浮かんだり、小さな波紋が広がったりしてはいるが、すぐさま化け物が出てくるような雰囲気ではない、
…と思う。

そして俺はといえば、砂利の混じった砂地に、女の子すわりをして、グラグラする頭を抱えていた。

酔ったのだ。

理由はもちろんルミである。

狐が去り、日没を迎えたルミは力を解放した。
前回よりすさまじい威圧感（プレッシャー）も、相手がルミだとわかってしまえば、恐怖の対象ではなかった。

ちょっとだけ土下座したいような気分にはなったけれど。

何故かご機嫌な我が妹は、魔力の解放と共に、突然「しゅっぱつしんこー」と元気な声をあげた。

泣いたカラスがもう笑った、と言う言葉を連想している暇もなく、俺とルミの足元に二つ＜大きな黒い花＞が咲き――

……逃げようとした俺は、花弁の間から伸びてきた、

やはり黒い蔓（つる）に雁字搦（がんじがら）めにされ――

閉じてきた花にすっぽり包まれた。

暗闇の中で、錐揉み状態と、無重力落下を同時に味わったあげく、今こうして現在に至る。

立ち上がれなくても仕方ないよね。

よれよれになった俺を見て、ルミは嬉しそうにきゃらきゃら笑っている。

遊園地にいくたびに、ルミのジェットコースターに付き合って、同じような目にあっている俺は怒りも湧かない。

いやな慣れかたである。

しかし、これはちょっとキツい。

五回連続ビッグサンダー・マウンテンｉｎ平日よりキツい。

あげくに裸足だ。

ルミはといえばスリッパだ。緑の河童スリッパだ。

非日常における緊張感の必要性について、とタイトルまで考えつつ、脳みそぐらぐらな俺は考えることを放棄した。

さすがに中々回復しない俺が心配になってきたのか、ルミが近寄って来る。

「大丈夫？」

原因はおまえだ。

俺の背中側にルミが回る気配がして、なにか温かいものがふわっと張り付いてきた。

「ル、ミ――」

今、力を吸われたら死ぬ。絶対死ぬ。

そう、考えているのに、寄せ合った体から伝わる温かさが、

首の後ろをくすぐる髪からの甘い匂いが、

このこみ上げてくるどうしようもない幸せな気持ちが、

――血を、沸騰させていく――

「シン兄(に)ぃ。今は力をくれなくていいの」

ルミのかぼそい声が俺を一瞬正気にもどす。

「全部わたしにあげようとしちゃだめ。お願い、イヤかもしれないけど、少しでいい……」

――わたしを、欲しいと、思って――

囁くように言われたそれが、あまり理解できない。

ルミを欲しいと思う？

――守ろうと思うのを、今はやめて、わたしを認めて――

声にならない声で囁くルミ。

俺が？ルミを？認めていない？

どうして？

頭に上った血が急速に下がっていく。

◆

ぴたりと寄せ合った俺の背中とルミの体の温度が、少しずつ、なにか違うものに変化していき、ぐらぐらだった三半規管がゆっくりと落ち着いていく。

心臓はばくばくと騒がしいのに、どこかで冷静な俺が、この光景をみている。

「シン兄(に)ぃの後ろにいるのは大好き。でも肩を並べて歩きたいときもあるの」

やさしく、諭すようなルミの声が、俺の体に確実な力を呼び起こしはじめる。

嬉しくて泣きたいような、でも笑い出したいような、

本当に小さかった、二人の体格にまったく差のなかった頃の無邪気な気持ち。

あたたかくて優しい、父さんと母さんのハグの時に感じたそれ。

背中にいるルミから流れ込んでくるなにか、きらきらしたきれいなもの。

色々ななにかが俺の後を押す。

「それには、もうちょっと背を伸ばさないとな」

やっとの思いで、ルミに答えた俺の声は、

ちょっと嗄(かす)れた。

◆

信じられないぐらい頭がすっきりしている。

体には疲れも何もなく、むしろあたりを走り回りたいような気分だ。

寄り添っていた体を離し、俺とルミは、小さな頃のように手を繋ぎ、並んで池の側に座っていた。

繋いだ手が温かい。ほわほわと暖かい力が通っているのがわかる。

いつのまにか、みたこともない蝶が、ルミの指先にとまろうとしたり、頭の上に降りたりしようとしていた。ルミは蝶を驚かせないように、そーっと繋いでいない反対側の手のひらを伸ばして楽しんでいる。

それを横目に、さっきくっついてたときに起こったことについて、俺は少し考えようとしていた。

俺は「哺乳瓶」だと大おばあちゃんは言っていた。
多分それはルミの封印の解けた最初の夜のことを指す。

色ボケしてルミの足を舐めまわした俺は、そうとは知らず自分のなかにあるものをルミに譲った。
多分、それが俺に望まれた役割だったろう。
でもさっき起こったあれは、ルミの中で大きくなった力が、自分の中に戻ってくるような感触だった。

俺の体感でしかないが。

横にいるルミの圧倒的な力はまったく減っていない。初日の俺と似たようなことをしてくれたはずなのにである。

それは俺の気持ちが一方的であったことと関係が――

「グギャァ」

突然頭上を金切り声と共に大きな影が横切った。
俺は咄嗟にルミを庇って地に伏せる。
ざんっという風の音と共に、ばさっばさっと大きな羽ばたきの音が遠ざかっていく。

――なんだ？

伏せなければ、確実にぶつかってきていたその気配が少し遠ざかるのと同時に、伏せていた顔を上空に向ける。

……鳥？なのか？それにしてはデカいような？

池の反対側、今まで目に入っていなかった大きな岩の上に、謎の飛行物体が着地する。

人？じゃない。

「くるしっ」

おっと。

ルミが俺の下から顔を真っ赤にして這い出してきた。

「びっくりしたぁ、ってなにあれ」

聞くな。俺も知らん。

岩の上にいる生き物は人間と鳥が混ざり合った生き物だった。

くすんだ茶色の髪を振り乱し、ギラギラとした眼をもつその顔はまごうことなき人間の女性だ。

しかし本来人の腕がある場所には、大きな翼があり、下半身を覆う羽毛から飛び出ている足は、完全に鳥の形をしている。

おまけにその鉤爪ときたら…

――さっき頭の上をかすめたのアレか……

まるで、出刃包丁が前に三本後ろに一本そのまま備わったような鉤爪だ。

一歩間違えばスプラッタだった。

そしてなんだあの乳。

鳥だけに鳩胸ってか。

「シン兄(に)ぃ。なんかたくさん来た」

ルミの声に眼前の生き物（の胸部）から目をそらす。

離れた場所から、同じような生き物が、二羽、三羽、と飛んでくるのがみえた。

鳴きかわすその声は、醜悪で耳をおおいたくなるほどだ。

次々と正面の岩に降り立って、お互いにぺちゃくちゃと話すような仕草をし、こちらを見ては「ゲェーゲェー」と笑うようなそぶりをみせている。

やはりデカい。人間と同じくらいの大きさがある。

なにがって。もちろん体の大きさと言うか、そのなんだ。

メロンがいっぱいって俺は何を考えているんでしょうか。

わんこ少女のは照れて正視できなかったのに、あまりにも立派なそれからは目が離せないだなんて、俺は変なところで正直な１７歳である。

そんな俺の思惑をよそに、ルミが隣から立ち上がる。

「こんにちはぁーっ」

ルミが、少しはなれた人面鳥にむかって声を張った。

うん。礼儀正しいのはいいんだけどさ。なんか俺としてはすごく嫌な予感がします。

これは当たると思う。当たらなくてもいいけど。…当たらないといいけど。

## 7（後書き）

※ビッグサンダー・マウンテン＝某ねずみーらんどの、ジェットコースター好きには「たいしたことのない」アトラクションのひとつ。

## 8（前書き）

※残虐行為描写、流血表現があります

## 8

ルミの声は水面を越えて届いたのだろう。

ギャァギャァと喧(かしま)しく騒いでいた人面鳥たちが、一瞬静まり返り、そしてさらに大きな声で喚(わめ)き始めた。

グェーだのギャァだのの合間にコンニチとかニチワだとか、どうもルミの挨拶を真似して繰り返しているような声も混じる。

俺には中の一羽が舌なめずりをしているようにも見えた。

あの鉤爪はどうみても凶器だし、ここは退散するのが無難だろう。

ルミに声をかけようとして少し躊躇する。

ひょっとしてまたあの＜黒い花＞で移動するはめになるのではなかろうか。

それはごめんこうむりたい。

というか、俺には移動能力はないのだろうか。

その逡巡が……仇になった。

突然、騒いでいた人面鳥の一羽が飛び立つと俺たちのほうに向かってきたのだ。

体は人間くらいの大きさだが、広げられた羽は片翼目算2メートル以上。

岩のうえから滑空するように来るそれに、俺は、ルミを庇うようにして立ちはだかる。

なんで、武器になるようなもんなにも持ってこなかったんだろう。
迫り来る鉤爪に俺は両腕をクロスさせて顔面を庇った。

ゴォという風音と共に、まっすぐに突っ込んでくる人面鳥、その鋭い鉤爪が俺の腕にかかる。

ザシュッという肉の切り裂かれる音と同時に感じたのは痛みより先に熱さだった。
「ってぇぇぇーっ！」
思わず叫ぶ。
腕を切り裂いたのは、後ろ爪だ。
そのまま羽ばたいて飛び上がる人面鳥の「グギャァァァァ」という雄たけびには確かに嘲笑の響きが篭る。
俺の腕からはたらたらと血が滴った。

「シン兄(に)ぃっ！」
ルミが俺の声に反応して悲鳴のような声をあげる。

振り返ればルミの足元にはぐるりと＜黒い花＞が出現しはじめていた。
が、ルミの真後ろにいつのまにか回りこんだ別の人面鳥がいる。
羽音がしなかった。
ルミは気づいていない。

このままでは＜黒い花＞での移動が間に合わない。
最悪だ。

「ルミ！伏せろ！」
叫びながら俺は跳んだ。

正確にはルミを飛び越えた。

そのままルミに迫ってきていた人面鳥に躍りかかり、翼のある両肩に拳を振り下ろす。

跳躍によって加算された全体重を籠めて。

「ギャァッ！」

金切り声をあげてそいつが仰向けに倒れこむ。

地面から砂埃が舞い上がった。

振り下ろした腕で両肩を掴み、すかさず片翼を右足で力いっぱい踏みにじる。

合成でもなんでもない。本物の翼だ。

裸足の足裏に伝わる熱は生暖かい。

どうみても、女性な顔と乳房をもつ生き物に、顔面に拳を叩き込むことを躊躇する。

左の翼を踏まれても、鉤爪でおれのジーンズをかきむしってくるそいつは、化け物に間違いないのだが。

「シン兄(に)ぃ、鳥さんから離れて！一緒には運べない！」

ルミがしゃがんだままそう叫ぶ。

しかしそうは言われましても……

頭上で羽ばたく音と喚き声が聞こえる。あとの二羽だ。

この足と手を離せば向かってくるだけ。つまり今ひと…鳥質(とりじち)をとった状態だ。

「おまえだけ移動しろ。俺、あの黒い花にもう一回包まれたら死んじゃうわ」

ぐはっジーンズが破れて鉤爪が直接足を傷つけ始めた。これはこ

れでヤバイ。
軽口をたたいてる場合じゃない。
腕のビリビリとした痛みも増してくる、だんだんと腹が立ってきた。
女だろうがなんだろうが、ギャアギャアと金切り声を上げられるのも不愉快だ。
苛立ちと、苦痛。
焦燥と、嫌悪。
急速に上がっていく体温、目がちかちかして、全身がむず痒い。

――ハヤクコロセ――

どくん、と自分の心臓の鼓動が一度だけ大きくなった気がした。
「シン兄(に)ぃだって移動はできるはずなんだよ！」
なんだか必死なルミの声が、すぐ近くにいるのに、だんだん遠ざかっていく……
嫌だ。こんなのは嫌だ。嫌なのに。
暴れる翼を踏みにじる足の下で、ゴキュっとくぐもった音がする。
力が入りすぎて、人面鳥の肩骨が折れたようだ。
鳥はギャァァァ！と叫びなお一層暴れる。
ばさばさと羽が地面を打つ。

ルミがまだ何か叫んでいる。

俺の足はいつのまにか人間ではなくなっていた。

鋭い爪。盛り上がった筋。

砂埃（すなぼこり）の中見る間に様相を変えていく。

――コレガウルサイノデルミコエガキコエナイ――

どこからか凶暴（きわ）極まり無い声がする。しかし納得できる。これは俺だ。俺じゃない俺だ。

人面鳥の肩から、押さえつけていた片手を喉に滑らせる。やわらかい、血の通った喉。

気がついてみれば両腕も変化している。ぼこぼこと筋や腱が浮いて、太さも違う。

そして鋭い爪。真っ黒な鋼鉄のように光る爪。細くもない指と同じぐらいごつい爪。

そのまま人面鳥の喉に爪を食い込ませる。

ブツッという感触と共に、人面鳥の喉の皮膚が破れ、勢いよく血が噴出した。

俺の頬やそこらにぴしゃりと飛び散ったそれは温かく、生臭い。

赤いんだな。

ぼんやりとそう思った。

金切り声は止み、人面鳥の喉からはストローで僅かな水分を啜るような、ズズッ　ズズッという音が漏れる。

俺の足を掻き毟る鉤爪も動きを弱めていく。

目の前の生き物から、命が失われていく様がまざまざとわかった。

事切れるまでしかし、力をゆるめることはしない。
血が周りに水溜りを作りながら、地面に染み込んでいく。
俺は、生き物を殺す、という行為に、酔いしれている自分を自覚する。

大量の血を流しながら、ガクガク、と最後に体を震わせ、すみやかに人面鳥は息絶えた。
どうしようか。

――コレハクサイタベラレナイ――

臭(くさ)い？頭の中の声にめんくらう。
そういえば？なにか匂う。鳩の糞が大量にあるような？
鳥独特の？塵と生き物の入り混じった匂いがする。

知覚した途端、匂いが鼻につく。血生臭さと、飼育小屋のようなそのほか雑多な匂い。
断末魔の表情を留める死体から、身を離して立ち上がる。

同時に背後と頭上に気配を感じた

「いやっ！」

ルミの悲鳴と共に、人面鳥の一羽が頭上から急降下してくる。
二手に分散された！

羽音とともに迫る鉤爪を頭の上で振り払う。
こいつの相手をしている場合じゃない。

ルミの元へいかないと――

しかし、かろうじて振り返った俺の見た光景は想像を絶するものだった。

ルミの足元に咲く巨大な黒い花、それは移動の際に見たものとは比べ物にならないほど大きい。
そしてその黒い花弁の下からは、禍々しい真っ黒な蔓が縦横に伸び、人の腕の太さほどあるそれが、
一羽の人面鳥を捕らえていた。

すげえ。

思わず見とれてしまった俺は、自分が陥っている状況を忘れていた。
完全に隙を作った俺の両肩に、容赦なく頭上しかも背後から鉤爪が襲い掛かる。

ギリギリと食い込んでくる爪。
痛いっつーの！
思わず出そうとした俺の声は何故か、

――獣のような咆哮だった。

肩に食い込む鳥の両足首部分を掴む。
そのままうつむいて左右に割り開くように力を籠めた。

びりっという俺のTシャツが引き裂ける音、人面鳥の爪が俺の肩

を裂くグチャっという感触がして、
鉤爪足が肩から外れる。
俺の肩からはだらだらと血が流れて、背や腹に伝わる。
続いてメキッメキッと頭上から筋肉繊維が裂けていく音がする。
気にせずさらに鳥の両足をを左右に引く。
ブツブツっと皮が破れ、肉の裂ける音がして、ギャァーという断末魔の金切り声が耳を叩く。
バシャりと俺の頭が血飛沫を被った。
ぼたぼたと何かやわらかい固形物も落ちてくる。
羽ばたきはとっくに止んでいた。そのまま背に重たいものがぶつかってくる。
両手に重たさがかかってくるのを感じて、手を離す。
背後にグシャリと、大きなものが落ちる音がした。
うつむいていたので、顔面が汚れるのは防いだが、頭と首と背中はどろどろと液体が流れる感触がして不快だ。
自分の肩からの血なのか、人面鳥の血なのかわかりゃしない。
体を犬のように振るう。
足元に肉片が落ちる。内臓だろうか。
背後を確認すれば、体下半分が無残に裂けた人面鳥の死骸。
もうかかってくることはない。
俺はルミの方へと足を向けた。
相変わらず黒い蔓が、人面鳥を締め上げているが――

花の上でルミが困ったようにふてくされているのがわかった。

## 9（前書き）

※残虐…かも？

## 9

どうすんのそれ
と、尋ねようとした俺の喉からは「グルル」とか「ガルル」という意味不明な声が漏れる。

ありゃ？
無造作に手を口元に持っていくと、今度は頬にグサっと自分の爪が刺さった。
これは…痛い。

「エアー、あー、あイウえウォ」

ふむ。喉を絞れば発音できるのか。油断するとガルルルとかになるな。
ひとまず余裕なルミの現状に俺も一息つく。

落ち着いて見れば、ルミの作り出した蔓は人面鳥を捕らえているだけで、ダメージを与えてはいない。
蔓で猿轡をしているが、人面鳥の目は血走っているし、鉤爪は蔓を掻き毟っている。
降参しそうな雰囲気はない。

近づいた俺にルミの視線が移動して、困った顔がさらに悲しそうな顔になる。

「シン兄(に)ぃ、これどうしたらいいのかな？」

殺せばいいんじゃないだろうか。
なんだかまともな感覚ではここは測れない。
まだ腕も肩もビリビリと痛い俺はそう思って言う。

「コロロォ……」

……コロロォってなんだっ！

まだうまく発音できないな。
俺は殺せ、という合図のつもりで親指をたて、そのまま下に向ける。
一瞬、怪訝そうな顔をするルミ。
そして気がついたかのように目を丸くして人面鳥に視線をうつす。
そのまま人面鳥を捕らえていた蔓植物が大きく弧を描いて――
眼前の池にそれを叩き込んだ。

……なんでそうなるんだ。

ザブッと水音をたてて、人面鳥が水の中に沈む。が、すぐに顔を出す。
全く戦闘意欲を失ってないのが、こちらを睨む表情からもありありとわかる。
めんどくさい。もう一戦やらかすのか。
そう思った途端のことだった。
ザザザザッという大きな水音と水飛沫とともに、池の中から出て

きた何か巨大な金色のものが、
俺たちの視界いっぱいに広がった。
俺とルミは反応できずに氷のように固まる。
あっという間だったと思う。
巨大ななにかは出てきたときと同じく突如ザバザバ水をはね散らかしながら、池の中に消えた。

さっきまで池の真ん中にいた人面鳥と共に。

今のはなんだ。
池の直径にふさわしくない大きさの生き物だったぞ。

化け物の災難が去ってまた一難なのか？

赤い池の水面はまだ波立っているが、巨大な化け物の痕跡はもう僅かな泡でしかない。

「ナマズかな？」

静かになった場でルミがぽつりと言う。
ルミの周りから音もなく蔓と花が消えていく。

なぜに。
気になるのはそこか？
ナマズには目がいっぱいあるのか？

「クオァなれよウ」

「ここを離れよう」と言おうとしたらやっぱり動物のうめき声のようになってしまった。

早く戻らないんだろうか。発音がめちゃくちゃ難しい。
身振り手振りで池とは反対方向を指す。
「そうだね。シン兄(に)ぃが狭間(はざま)嫌いなら歩くしかないかなぁ」
ルミが自分の足元を見下ろしながら言う。
そうだった。ルミは河童スリッパのままこっちへきたのだ。
そしてよく今のでわかったな。
狭間(はざま)も嫌いだが、さらに言えばおまえの移動方法は断固お断りしたい。
俺の足はといえば、裸足は裸足だが、……なんと形容すればいいんだろう。
とにかくとっても丈夫そうだ。
なんならおんぶしてやってもいい。
ルミのスリッパはかわいいだけの、実用品ではないタイプだ。
俺はルミに背中を向け、首だけ振り返って乗るか？とゼスチュアをしてみせる。
ルミは首をかしげ、その後ふるふると頭を左右に振る。
「シン兄(に)ぃ、あのね言いにくいけど――」
体中血まみれ、だと。そういえばそうだった。Tシャツもジーンズもぼろぼろだ。
しかも今相当外見が変わってるんじゃないか？俺。
ルミはあんまり気にしてないみたいだが。

痛くないの？と尋ねてくるルミに首を横に振る。
心配をかけているだろうが、本当なので仕方ない。

しかしとにかくこの池からは離れたい。
血を洗い流したいがさすがにアレを見た後池には近づけない。
不思議に体の痛みもひいていることだし、移動しよう。
しゃべるのがめんどくさい俺はまたもや身振り手振りで頑張る。

ルミがこくこくとうなづいてくれる。
まったく。よく通じるものだ。

「こっちでのお家があるんだよ。そこに行けば体も綺麗にできるから」

ルミはそう言いながら元気よくある方向に歩き出す。
見渡す限り、人面鳥のいた岩を除けば、身を隠すところもない平野だ。
なだらかで歩きやすいのはいいが、ルミの目指す方向に建物なぞかけらも見えない。

だいたい月は出っぱなしだし、時計も持ってきていないのに。
なぜルミは自信満々に歩いて行くのか。
疑問点はたくさんある。
しかし、ルミ、と呼びかけようとした俺の声は「ルルゥ」であり、
なんだかいろいろ諦めた俺は、
スリッパで歩く妹の後を着いていくのだった。

◆

どれくらい歩いただろう。
いまいち変化が解けず、話すことをやめた俺の横で、ルミがいろいろと歩きながら教えてくれる。
そもそもの初日に寝かされてしまった俺と違い、ルミは色々と家族から説明を受けたのだ。

「魔王になってみたい」と言ったルミに、やればいいと言ってくれたのは大おばあちゃんだけだったとか。
しかしその大おばあちゃんも手伝う気ゼロだとか。
なんでだかしらないが忙しいらしい。
ばあちゃんズに連れられて色々狭間を使っての移動が楽しかったとか。

ルミと俺はやっぱり若すぎて力が不安定らしいんだとか。

「でも負けないんだもん」

なんてあっけらかんと言うルミに、俺は言葉もない。
あっても今話す気にはなれないのだが。

ふいにルミが喉元から細い鎖をたぐって、ひし形の石を取り出す。
白と緑の入り混じったそれは、淡く輝いている。

「これ色が変わるんだよ。真っ白になったら夜明けなの」

お母さんがくれたんだよ、と嬉しそうに笑うルミ。

ほほう。俺がもらったのは耳をひきちぎられるか、という恐怖だったが。

あ、ハグもね。

でも俺は次回があるなら時計を持ってくるけどな。
ルミが手に持つ石は八割がた白い。
進行速度自体がわからないものだから、当てにしようがないが、
日没とともにこちらに来たにしては、
結構時間を食ってるんではなかろうか。

白っぽい石を手の中で転がすルミを見て思う。
やっぱり父さんと母さんが手助けしてくれそうじゃないこと、気にしてるんだな、と。
それで、ちょっとしたことが嬉しいんだろう。
複雑な気分だが。俺は今は何も言えない。

てくてくと二人歩けば、まるで、いつもの登下校の再現だ。
ルミが楽しそうに話し続け、俺がそれに相槌を打つ。
今日はもうこのままなにもないといい。

景色が変わっていく。何もなかった平野に、樹木がまばらにそびえ始める。
だが、木の種類に詳しくない俺でも、なんだかあんまりなデタラメさに首をひねりたくなった。

幹が妙に赤いことを除けば普通の針葉樹のそばに、しましまのヤシの木っぽいものがあったり、
どうみても松の木にしか見えないそれに、紫のひまわりみたいな花が咲いていたりするのだ。

スリッパのくせに迷いなく歩くルミは、まったく気にせず、さらに木が多いほうに向かっていく。

そっちは森じゃないでしょうか。
なにしろわかっていない俺はついていく他ないのだが、それにしても――

どんどんと森が深くなっていく。そもそも道もない。
木の根と根が絡み合い始め、枝が低く低く立ち込めてくる。
不気味なほどにあたりは静かで、生き物の気配はするが、ちょっかいをかけてくる様子はない。

さすがに話すことが難しいとはいえ、ルミに問いたださねば、と思った俺を、ルミが振り返った。

「ついたよ！」

おお？え？
どこかに着いたらしい。思い出せばそれは「こっちでのお家」だったはずなのだが？

# 10

俺の眼前にそびえたっているのは、複雑に絡み合う木々だった。
樹齢何百年ともしれぬ大きな樹木が、びっしりと幹や枝を寄せ合って壁を作り、その周囲を幾重にも蔦（ツタ）がとり巻いている。
人工物の気配はまったくないのに、何かの意思が確実に介在しているとしか思えない。
窓もない。扉もない。しかしこれはまぎれもなく建造物だ。

荘厳なそのたたずまいは、太古の神殿を思わせる。

ちょっと気圧（けお）されて、立ち止まってしまった俺を、ルミが、どうしたの？というように振り返る。
なんとも思わないのだろうか。それとも、これがなにかわかっているのか。

「シン兄（に）ぃ？」

呼びかけてくるルミに応えて、俺はしぶしぶ前に歩きだす。

木が組み合わされて作られた階段に近づいてみれば、遠目からみると普通だった樹皮の色は薄い緑で、
しかしこれまで見てきたものと比べれば格段に普通だ。
頭上と幹に絡み付いている蔦も濃い緑色で目にやさしい。

入り口はどこにも見あたらない――
と思ったその時だった。

バサッと真正面の蔦がかきわけられ、人影が現れる。

「おかえりなさいませ」

俺たちを出迎えたのは、ベルだった。

入り口は、分厚く上から下がる蔦に隠されていたのだ。

ぎょっとして固まる俺を尻目に、ルミはすたすたとベルに近づいていく。

知ってたんならちょっとくらい教えてくれたらいいのに。

びくついたりして俺恥ずかしいんだけど。

これが「お家」なのか？

「ただいま！ベルさん、ここってお風呂あったかな？」

かなり歩いたと思うのだが、ルミは元気だ。

不思議なことに俺にも疲労感はない。

「水浴になりますが、お役には立ちますかと。　シンゼラート様のそのご様子はいかがなさったのでしょうか」

俺たち二人がくぐり抜けられるように、蔦をささえながらベルが見つめてくる。

なんだか真剣に心配してくれているようだ。

血まみれでずたぼろだしな。

くすぐったい気持ちになりながら俺は、顔を近づけてきたベルに、なんでもない、というように手をひらひらさせる。

……しまった。これでは追い払うようなしぐさだ。

「お話にくいのでしたら―」

このように、と自分の喉に手のひらを当てるベル。

「すこし押し上げるようにいたしますと、話しやすいかと」

おお！

やっと俺の役に立つ情報が。

さっそく自分の喉に手をあてようとして、目の端に映った爪をみて我に帰る。

あぶねえ。今度はあごに爪がささるとこだった。

そっと角度を変えて喉に手の平をあててみる。

「こォか。んーんー、話せテるゥかな」

違和感はぬぐえないがいける。

「お怪我は治っておいでのようですが、坊ちゃまの血以外にもう一種類いやな血の匂いがいたします」

ああ人面鳥の血をしたたか浴びたからか。

さすがというかなんというか犬だな。

どう説明すればいいんだろう。

ルミも眉をよせている。

「お引止めして申し訳ありませんが、継承権を持たない者を傷つけることは、今回の争奪戦において約定違反とされる可能性があります。いったい何と戦われたのですか？」

えーっと。
ひょっとしてそういう脱落の仕方もあるのか。
しかし、あれ俺らが悪いとかそういう話じゃないような。
「女の人の顔をした鳥さんが、喧嘩ふっかけてきたから殺しちゃった」
ルミが困った顔のままベルに告げた。直球ストレートもいいとこである。
殺したのは俺だ。ルミは池に放り込んだだけだ。ナマズに食べられちゃったけど。
ルミにとっては「二人でしたこと」だろうが、あれは俺の暴走だ。
「ああ、地球で言うところのハルピュイアですね。 魔界での呼ばれ方を日本語に訳しても「翼を持つ女」にしかなりません。 まあそれはさておき、殺したのですか」
今度はベルが困った顔をして考え込む。
日本語に訳したら金色のあれはなんなんだろうな。
多分ナマズじゃない。
「大奥様にはかりましょう。とりあえずシンゼラート様は水浴のご用意ですね。サルミスラ様はいかがなさいますか？」
俺たちを蔦の奥の入り口へ案内しながらベルが言う。
「あのね、おなかすいたの、食べてからお風呂がいい」
そんなルミの返事を聞いて、俺もかなりの時間何も食べていないことを思い出したのだった。

◆

俺とルミを一緒に浴室まで案内した後、ベルは、後で迎えに参ります、と言ってルミと一緒に去ってしまった。

この建物の中には壁はあるが扉がない。すべて蔦のカーテンだ。明かりは壁の部分の木に生えているきのこ。きのこって発光したか？そもそも人の頭ぐらい大きいってどうなの。

俺が案内された「浴室」は広い部屋の真ん中に、大きな切り株をくりぬいたバスタブがあるものだった。天井からフックのように伸びた枝を綺麗な水がとめどなく流れて、シャワーのような役目をはたしている。落ちていく水は切り株の根の間へ。

俺は自分の爪に気をつけながら、血を洗い流した。腕の傷は綺麗に閉じている。薄らと白い線が残ってはいるが、なにか尋常でない回復力のおかげでダメージが少ないということはわかった。肩の方はピンク色のみみずばれになっている。これも治り方がおかしいが、早くなおってくれる分にはありがたいので気にしない。

問題は、体を綺麗にした後のＴシャツとジーパンだ。ジーパンはまだ膝下がだめになっただけで済んだが、Ｔシャツは血糊ごと体から剥がした時点で、ただのぼろきれになってしまった。

別に惜しいとかでなく、今着るものがないことに困る。どうするかな。

「シンゼラート様、着替えをお持ちしました」

蔦の外からタイミングよくベルの声がかかり、俺は着替えを受け取ることが出来た。

……これはベルの散歩の時用の半袖のパーカーとジャージだ。別に文句はないが。

まさか今から散歩でもしろと。

「トっテきテくれタのか？」喉に手をあてながら聞いて見る。

「はい。あと二時間足らずですが、お二方には魔界にいていただかなくてはなりません」

そうなのか。

まあどうせ移動する気もなかったんだが。散歩しなくていいんだな。

俺は手早く着替えてベルの側に立った。

気になっていたことを聞かねばならない。

「セネとエルに謝りにいきタい。ここにいるのか？」

見舞いだって言うのは変な気がして。

だって俺が傷つけたんだから。

「おります。その前にお食事をさきにいかかですか」

◆

俺は飯を断って、セネとエルがいるという部屋の前に立っていた。

ベルは、俺をここまで連れてくると、今度はルミを入浴に案内するとかで、去ってしまっている。

蔦のカーテンは、ノックができるものでもない。

俺は気持ちを落ち着かせてから、目の前のそれを引き開けた。

だが、蔦のカーテンを引き開けた先には、まだ廊下があり、その先にもう一つカーテンがある。

俺は拍子抜けしてしまった。

まだ先じゃないか。

しばらくぼんやりしてしてしまった、が、ようやく気をとりなおして、木で作られた廊下を進む。

次の蔦の入り口まで近づいたそんな俺に、妙な声が聞こえてきた。

キャイン、とかワフッ、だとか、子犬が興奮して暴れまわっているような声だ。

時折、ドスッとなにか物と物がぶつかる音までする。

微妙にその子犬が暴れまわっているような声には、聞き覚えがある。

ここで合ってるようだ。

なかの騒がしさに、躊躇を覚えつつ、今度こそは、と俺は蔦を引き開けた。

# 11（前書き）

## 11

――お尻を浮かせるのは卑怯よっ！

――エルだってさっき浮いてましたぁー

部屋に入り込んだ俺の耳と目に飛び込んできたのは、元気なわんこ少女達の言い合いだった。

奥には大の大人が四人は寝られそうな大きな寝台があり、

セネとエルはその上で向かい合って座っている。

言い返されたことが腹に据えかねた様子で、エルがぶんっと両手で抱えたクッションを振り回す。

セネが上体をそらせそれを避ける。

二人はそのまま両手でかかえたクッションで殴り合いを始めた。

興奮のあまりなのか、二人とも俺に気がついてくれない。

俺は喉に手をあてて、しかしなんと声をかけたものか迷いに迷った。

声をかけてから入れば良かった。後悔は先に出来ない。

しかし二人とも元気いっぱいだ。

俺はほっとしたような、心配して損してしまったような脱力感を覚えつつまごつく。

いっそ回れ右して帰ろうか、と思ったところで、

セネが顔面におもいきりクッションをくらった拍子に、こちらを向いた。

「あう…」

エルも続けてこちらに気がつく。こっちはだんまりだ。
気まずい。ものすごく気まずい。
しかし二人が上半身に包帯を巻いていることに気がつき、俺はチリッとした心の痛みと、
今回は緊張しなくてもいいという安堵を覚えた。

静まりかえった部屋で、二人が動きを止め目を丸くして驚いているのがみてとれる。
目的は見舞いだ。頑張れ俺。

「元気そうでよかっタ」

やっとの思いで声を出す。無論喉に手をあてたまま。

「その……昨日はひどいことしテ、悪かっタ」

ずいぶん遠くから頭を下げた。
なんとなくベッドにいる女の子に近づくのがためらわれるからだ。
たとえ元気に殴り合いをしていたとしても。

許してもらえなくても仕方ない。
昨日の俺は、むしろ今現在の俺は、凶暴化した自分を全くコントロールできない、
残念なガキんちょだ。

ところが俺のこの謝罪を受けた二人の反応は、挙動不審としかいいようのないものだった。

突然セネが、

「ああ！足がっ足が痛いっ、誰かになでてもらわないとっ」

と、言い出し寝台に倒れこんだかと思うと、エルが、それを見て焦ったように

「痛いのです。わたくしもなでてもらわないと！」

と、セネに同じくこちらもこてんとベッドに倒れこむ。

さっぱり状況がわからない。

二人ともさっきまで元気いっぱいにみえましたが。

そりゃ包帯はしてるけど、楽しくクッションで殴り合っていましたが。

なにこの小芝居。

二人して、うんうん唸(うな)ったり、その合間にチラッとこちらをみたり忙しそうだ。

これは、謝り方が足りないということだろうか。もっとちゃんと謝れとか？

たしかに入り口で突っ立って謝るのは変だったかもしれない。

それとも見舞いなんかされたくなかったとか。

そっちのほうが有力か。痛かったろうし。

俺は完全に及び腰になっていた。

わんこ少女達の意図が読めない。

出直したほうがよさそうだ。

じわりと俺は一歩後ろに下がった。
チラチラと確認の視線をくれていたセネが、途端にくしゃっと顔をゆがめるのがみえる。
なんだその反応。

「帰ってしまわれるのですか」

あわてたようにエルが声をかけてくる。
いや俺にどうしろと。むしろ誰か教えてくれ。

「セネはシンゼラート様になでてほしい！」

「セネ！早いです！」

うお。やっぱりこの娘らよくわからん。
あんな目にあって何故に。俺が怖くなったんならともかく。
嫌がるんならまだわかる。

「早くない。坊ちゃま。ダメでしょうか」

言ってることは意味不明だが、セネの瞳は力強い。
エルはなんだかおろおろしている。

なんだか引いてた自分がバカみたいだ。
ええいやってやるさ。やけくそだ。
そもそも見舞いにきたんだ。仲直りできるならそれにこしたことはない。

俺は意を決してズカズカと部屋を横切り、セネとエルの側まで行

く。
乳さえみえていなければ遠慮するようなことではないのだ。
何故か右手と右足、左手と左足が揃った変な歩き方になってしまったが。

きらきらと期待に輝くセネの目を見ながら、寝台の端に腰掛ける。
立ったままでは届かない。
二人はよく似ているが、近づいてみればセネは明るい茶色の毛並みで、
エルはちょっとグレーがかった茶色だ。

仰向けになって見上げてくるセネ。
これはちょっと美少女めいてるがわんこだ。だって耳があるし。
自分に言い聞かせながら、爪をたてないようにそっとセネの頭に手を置く。
上半身の包帯が痛々しい。俺の抉った腿にも巻かれている。

目を細めて嬉しそうにするセネに、なんだか申し訳ない気持ちになって、
やさしく頭をなでた。俺はなんだかおかしいくらいに早く傷がふさがった。
この娘達(こ)もそうだったらいいのに、と願いながら。

ぱっと見、タテガミのようにみえる、勢いのある髪質は触ると意外にやわらかい。
まあ今の俺の手と比べればなんでもやわらかいのだが。

「わたくしも、わたくしもなでてほしいです」

エルが目をうるうるさせながら言ってくる。

自分が寝台の中央までいくのはちょっと、と思った俺はエルにおいでおいでをした。
喜んでセネを乗り越えてくるエル。
ちょこんと俺の横に座った彼女の頭を、気をつけながらなでる。
エルの髪もすごく触りごごちがいい。犬とは違う。
真横に座られるとやっぱり女の子みたいでどぎまぎしてしまうが。

エルは腹に怪我をしているはずだ。
なんだか包帯の巻き方がおかしい、ような？

エルが嬉しそうにどんどん擦り寄ってくる。
もうすこしでぴったり俺にくっつく、というところで突然セネが、がばっと割り込んできた。
無言で俺の腿に頭をぺたっと置く。
そんな硬い枕でいいのか、とかエルがわなわなと不機嫌に身を震わせているが大丈夫か。
と内心でつっこみをいれつつ、見ればセネの包帯の位置もおかしい。違和感がある。

二人ともお腹を庇うように巻いているのではないような？

セネに邪魔をされたエルが、ちょこまかと反対側の俺の腿に回りこんで来た。
仰向けになって俺の腿に頭をのせているセネとは違って、頬をのせてすりすりと顔をこすり付けてくる。
この状態は、なんだか絵的に危ういような。
と思いながらも、俺は両手を使って二人の頭をなでた。
爪で傷つけないように細心の注意を払う。
これぐらいで許してくれるなら、安いもんだ。

泣いて怖がられたっておかしくなかったのだ。
それだけのことをしたのだ。

しかし。
段々と。
雰囲気があやしくなってきた。

最初はセネだった。
俺の手をがっちりホールドしてあむあむと甘噛みを始めたのだ。
噛まれるのはくすぐったいし、ホールドは爪をたてた本格的なもので、ちょっと痛い。
なにより、わんこだと思いたいのに、変に倒錯的な状況がちょっと背筋をぞくぞくさせる。

俺の手はジャーキーかなにかだったのか。と、あさっての方向に意識をそらそうとするが、
えらく集中して俺の手を噛むセネから目を離せない。
と、そこへ反対側の手になにかやわらかい感触がして。
セネが、俺の手首あたりを口を押し当てて吸い始めた。

ここにきて哺乳瓶役がきた！？

うっとりした表情のエルは熱心にチュウチュウと手首の内側、皮膚の薄いところを吸い上げる。
なにかそのエルの表情が言いようもなくヤバい。

もしもし。
君らはいったい何を。

腕を引き抜きかねば、という思いが、もし、また傷つけたら、と

いう考えに邪魔される。
だがやわらかく二人に愛撫されるその感触がなにか、もやもやとした気持ちを俺にもたらす。
ダメだ。これ以上我慢すると、変な場所が変な反応をだな！
やめようよ、と言おうとした俺の声はしかし、
「ガウガウ」という力のない意味不明の唸り声だった。
俺の両腕は封じられていたのである。

## 12

ゆっくりと両側からやわらかい重みがかかってくる。
やばい。誰か助けて。このままだと押し倒される。
セネとエルの謎の攻撃に、俺は手も足も出せない。
しかし――、やっとそこへ救いの声がかかった。
「大奥様のところへ参りましょう」
窮地の救い主はベルだった。
いずこからか現れたベルに、わんこ少女たちは突然寝たフリを決め込み、俺から離れた。
素早い。素早いがあまりにもそれはあからさまな演技で、でもツッコミをいれたいかと問われれば、早くこの場を逃げ出したかった俺は、このときとばかりに立ち上がる。
ベルがいつの間に部屋に入ってきたのかわからなかった。
いつからどこから見られていたのだろう。
恥ずかしくて顔が熱い。
セネとエルの部屋を出て、とぼとぼとベルの後について歩く。
長い長い廊下はあまりにも太くて大きな樹木が平坦に伸びたものだ。

俺の足の爪があたってカシカシと乾いた音を立てるほか、音はない。
そんな静かな空間の中、ベルが前を向いて歩きながら話し始めた。
「どうも獣魔は自分より強い相手を慕う傾向がございまして」
お坊ちゃまにはご迷惑をおかけいたしました、と続くベルの台詞に、さらに羞恥心が湧く。
もうその話題はいいです。勘弁して下さい。
俺は歩きながらうつむく。
「しかし、注意点が。魔族というものは見かけがそのままの年齢というわけではございません」
歩きながらしかも話しにくい俺は、ベルの言うことをただ聞くしかない。
普段なら説明書と注意事項だけはすっとばすのだが。
「おおよそ地球標準年に照らしあわせましても、セネやエルは四十年は生きております。魔界では成人したばかりというところでしょうか」
それを聞いて、熟女かよ！と、思わず心の中で突っ込む俺。
みため中学生くらいでおまけにわんこなのに！
四十年生きててあの小芝居はないだろう……。
という俺の内心はさておきベルの話は続いた。
「おおよそ魔族であっても、精神年齢に外見が引きずられる場合が多いようです、長く生きるものほど、魂が成長しにくいとでもいうのでしょうか。とはいえ、高魔力なお方は自分がそうでありたいと

いう外見を他にむけて投射することが可能です」

がいけんをとうしゃとは。高魔力。なんかひっかかる。

ん？ベルの外見は２０代後半？くらいに見えるが。

疑問に思った俺は思わず喉に手をあてて尋ねた。

「おまえは？」

ベルが足を止める。まだ目的地についたわけではないようだ。

「わたくしは、大奥様が姿を変えてくださった外見です。固定されています。本来はシンゼラート様とサルミスラ様に可愛がっていただいた「ベル」に近いかと」

ベルにつられて足をとめた俺はめんくらった。ベルはそもそも人間の形じゃないということか。

いや犬と人の姿を行き来している時点で色々おかしいんだけど。

「犬なのになんで日本語？」

セネもエルもペラペラだし。

ベルは西洋犬だろ。

「カルーベルはもちろんのこと、現在魔界には故あって日本語を習得しているものがたくさんおります。後は中国語、英語、仏語あたりでしょうか」

バイリンガルな魔物さんね。あの人面鳥はなんだったんだ。英語はしゃべってなかったぞ。

ベルはまた前を向いて歩き出したが、しばらくしないうちに、蔦

で覆われた入り口の前で足を止めた。
丁寧に入り口をかきわけて、俺に先に入るように促す。
「こちらでご一緒に大奥様をお待ちしましょう。サルミスラ様もういらっしゃいます」
わかったようなわからないような。
なにか根本的なことを説明してもらえてないような気がしつつも、俺は蔦をくぐった。

◆

ベルに案内された部屋は、それまでとは違って、広く張り出した大きな枝がテラスのようになった場所だった。
頭上には空が見える。相変わらずピンクだ。
階段を上った覚えはない。しかし入り口よりここは高い。
床は枝についた葉と蔦がびっしり絡まりあって絨毯のようになっている。
足元がやわらかいのだ。
テーブルが中央にあり、ルミが何か飲み物を口にしている。
そのテーブルはまたありえないくらい大きな薄いオレンジ色のきのこで、ルミがこしかけているのも同じようなきのこだ。
座ったりできるということは堅いのか。
俺に気がついたルミがひらひらと嬉しそうに手を振る。
すごくくつろいでいるのが見て取れた。
俺もいい加減麻痺してきたが、ルミの平常心にはかなわないよう

な気がする。
ルミと傍らのベル以外に人の姿はない。
大奥様というのは大ばあちゃんのことなのか、それとも母さんとか？
「ベルさん、今何時？」
ルミが何気なくベルに尋ねてきた。手には木で作られたマグを持ったままだ。
そう、いい加減何時なのか知りたい。確か魔界にいなくてはいけないのは四時までだったか。
「四時まではもう一時間をきっております」
時計も何ももたないベルがそれに答えた。
思わず俺は空を見上げるが、相変わらずでかすぎる月モドキはまったく動いていない。
真上で、ただ冴えざえと輝いている。
「なんでわかるの？どうして日本の時間なの？」
すごいすごいとばかりに瞳をきらきらさせてルミが重ねて聞きたがる。
「サルミスラさまも現在が何時なのかおわかりになるはずですよ。日本時間に関しましては――」
と、ベルがにこやかにルミに答えているその後ろで、地面から黒い蔓と枝が伸び始めた。

俺の腕には鳥肌が浮き上がる。
これは――
見る間に黒い植物は人の形を型作り、その中から大おばあちゃんが姿を現した。
ベルがさっと身をひいてお辞儀をする。
大おばあちゃんが発する、すさまじい威圧感、存在感、その他もろもろ。
あの日リビングで感じたものより一段とプレッシャーを感じるのは、魔界であるからなのか、俺が魔力の存在を肯定でき始めたからなのか。
自然に身構えてしまう。敵ではないはずなのに。
現れたその場所に立ったまま、大おばあちゃんが俺をじろりと睨みつけた。
「えらく不安定じゃないか。こっちへおいで」
やっぱり迫力のある声だ。
無造作に手招きされた。何をされるんだ。怖い。
そんな俺の怯えに頓着せずに、ベルが後ろからぐいぐい押してくる。
やめろバカ犬。
「手をお出し」
よろよろと歩み寄った俺はさからえずに大おばあちゃんの手に手を置いた。

大おばあちゃんと俺の手がふれあったその途端。
体の中に光が流れこんでくるようなイメージがわいて。
静かで、大きく、圧倒的な力が、俺の中のコントロールできないなにかを落ち着かせていく。
みるみる内に俺の手足が、爪が、見慣れた手足に戻っていった。

「どうもわたしは兄妹というものをみくびっていたようだ。いい加減長生きしているのにね」

大おばあちゃんのはりのある低い声は、でもどこか不思議そうに思っている感情をにじませていて、俺はその人間らしさに驚く。
どういう手品なんだろう。俺は自分の腕をさすって、元通りであることを確認した。

「サルミスラもおまえも魔力が伸びている。ただ、やはり<器>が成長していないから不安定なのだろうね」

あれは不安定と呼ばれるような現象なのか。

「治してくれてありがとうございました」

とりあえず礼を言う。普通に喋ることが出来た。

「あ、戻っちゃった。かっこよかったのに」

これはルミだ。俺にあの姿でどう日常生活を送ればいいというのだろうか。
ため息をつきながら大おばあちゃんが俺とルミを交互に見る。
俺はなんにもおかしなことは言ってない。多分ルミだ。と思う。

「治っただの戻っただの。そもそもシンゼラートは人狼だからね、自由に姿を変えられねばならんのさ」

そう言う大おばあちゃんの後ろで蔓がまたたくまに組みあがり、安楽椅子みたいなものを形成する。

これは便利だ。

そしてまた出た「人狼（じんろう）」という言葉。仔狐もそう言ってたっけな。

大おばあちゃんは自分でつくりあげた安楽椅子に腰掛けながら、続けた。

それは早く家に帰りたい俺には、拷問のような長い話だった。

## 13

魔界とはそもそも、地球と呼ばれる人間界が生み出した世界である。
異能を使役する生き物を、人は同じ大地に生まれたものであるのに、大きく拒絶し、忌避してきた。
その存在そのものを遠ざけようとする力が働き、新たな大地が異界に生まれ、異能を使役する者達は流された。
人の子よりも大きな力を持ちながら、異能者たちは数が少なかったのである。
これは新たに起った神々の力も寄与していた。

なにも魔界だけが人間界から切り離されたわけではない。
時には国を擁する大きな大陸が地球上から消滅した。
独自の文明を誇り、安心と歓楽に生きる人々が、やはり世界から疎まれたためである。

とはいえ、力を持たぬ人の子が全て異能を疎んじたかといえばそうではない。
また全ての異能を持つ生き物が流されたわけでもない。
魔界に流された異能を、慕い続ける人々は少なからずおり、社(やしろ)を建て降臨を願った。
流された魔界に住む生き物達も、また生まれた地球を恋しがった。

細く小さなものではあっても、お互いが伸ばしあった絆は、実を結び、魔界と人界はやがて行き来が可能となった。
しかし、異能の存在を感じ取ることが出来る人の子は減り、魔界から自在に人界に来ることができるものも少ない。

断絶の間に世代が変わったのは何も人界に限りはしなかった。
人の世界で身を隠す必要がなくなった者たちは、その変身能力を失った。
なかでも人狼一族には、血族での婚姻において獣魔が生まれるようになった。
力と回復力はそのままに寿命を延ばし、変身能力を持たず、異界を渡ることもない亜人たちである。

亜人を認める者たちと、失われた力を嘆く者たちは袂を分かった。
魔界にも王を認める風潮が生まれ始めた折、変身能力を失いたくない人狼達は、地球への再移住を希望したのだ。
人狼達は、最終的に日本を選んだ。
異能を疎む風潮がごく僅かであり、神や魔物の領域に無理に踏み込まないという民族性を好ましく思ったからだ。
幾人かは祖先の生まれたその場所へ帰りもした。

そうして「月読（つくよみ）」と呼ばれる村が生まれた。
それは国家としてはまだ黎明期にあった日本にひっそりと作られた。
一切歴史に登場することのない、隠れ里として。人狼が住まう里として。

魔界でも大きな勢力であった樹魔の一族、つまりカルーベルはこれを全面的に支持し応援してきた。
カルーベルもまた日本に根を張り、軽部の一族として陰になり日向になり地球と魔界の人狼の一族を庇ってきたのである。
その目的は人狼と異なるものではあったが。

お互いに協力しあってきた月読の人狼とカルーベルは、シンとルミの両親のように、時に婚姻を結び、時に人と交わりながら神代（かみよ）のようにその力を振るわず、今日までを生きてきたのであった。

◆

「と。ここまではいいだろうね？」

大おばあちゃんのその言葉に、俺はぶんぶんと首を横にふり、ルミはこくこくと頷いた。

歴史系は苦手だ。

とりあえず座りたい。椅子はどこだ。

「なんだい情けない子だねぇ」

大おばあちゃんはさらに話を続ける。

◆

カルーベル家の計画。それは魔界をもう一度地球に同化させようというものだった。

そもそも人は、伝聞、言い伝え、噂話だけで異能を恐怖し、怯え、排除してきたのである。

それならば、同じく地球に生を受け、異なる生き物であっても理解を深め、干渉の範囲を定めることが出来れば、共存が可能ではないだろうか、と。

カルーベルは魔界でもその意見の同調者を増やそうと努力してきた。
一部にはまったく受け入れられず、一部の者たちは協力的ではなかった。
しかし、段々と「やはり地球に戻りたい」と思う異能のものたちを味方につけることに成功しはじめていた。

◆

ようやくキノコ椅子までの移動をはたした俺は、ふと疑問に思った。
初めて魔界にきた時、キリエさんが説明してくれた話とニュアンスが若干違う。
俺は、そのままその疑問を大おばあちゃんにぶつけた。
「キリエさんは地球をリゾート地だって言ったような――」
話を遮るかたちになったそれに、大おばあちゃんはくわっと眼光に力を加えた。
怖い。言うんじゃなかった。
「ドラクルの者たちは最初から協力的ではなかったさ。不死者達は大体人間を慰み者としかみていなかった。もしくは血族を作る材料だとしかね」

◆

しかし、その傾向は徐々に変わりつつあった。ヴァンパイヤ・ドラキュラ等と地球で呼ばれる吸血の不死者たちは、今まで「妊娠」することはなかった。
彼らの血族は人間から作られるものであり、厳しい、一族内の裁定を受けてそれは行われてきた。
同族殺しも頻発する彼らは、その強大な力を自らの快楽のためにしか振るわぬことが徹底しており、一族の数も少ないため魔王の選定にも参加することがなかった。

しかし、人界から切り離された魔界での生活が、どのような影響を及ぼしてきたのか、妊娠する不死者が現れ始めたのだ。
初期には秘匿されたその事実も、実例が増えるにつれ不死者達の態度に影響を及ぼし始めた。
昼夜の影響なく動くことが出来る者、殺戮に興味をもたない者、人界に渡ることが出来ぬ者、個体によって能力は様々ではあったが、旧世代より力を増した「自分たちから産まれた子」に恐れを抱くものもいれば、喜ぶものもいた。

人の子のいない魔界では変遷が起きる。人狼に遅れてまた不死者たちの中にも、人間界に戻ろうとする動きをみせる者たちがあらわれはじめていた。

◆

「キリエは新しい世代の不死者だけどね、考え方は古い。人間界にさほど興味もないのにハルノヴァックに惚れて妊娠したことで、人間界にいるんだよ」

キリエさん自体は魔界と人間界がどうなろうと構わないということか。
いや俺もだけど。
しかしキリエさんドラキュラなのか。兄貴は大丈夫なんだろうか。

視界の隅でルミが元気よく手を挙げる。
そんなことしなくても聞きたいことは聞けばいいと思うが。
ノリに寛容な大おばあちゃんがルミに頷いた。

「魔王になりたい貴族の人たちは、みんな魔界が地球に戻ることに賛成なの？」

それならむしろ争いにならない気もする。
他の候補のことを聞くあたりルミはまだ本気だな。
大おばあちゃんは少しの間目を瞑り、何か考えるようなそぶりをして口を開く。

「はっきりと意思を表明しているのはカルーベルだけなのさ。どの一族も意思を統一しているわけではないんだ。そもそも魔王を輩出したことがある一族を大公家として数えてはいるが、ドラクルのように魔王位そのものに興味をもたない魔族もいるんだよ」

◆

そして、前魔王は、地球より地球の産み出した別世界に、新たな人の子と絆を築こうとして、手痛い返り討ちにあった。
もちろん築こうとした絆とは、完全に魔物に人が伏する世界、つ

まり人間が異能に隷属することを目的としたものだった。
前魔王に協力した魔族は決して少なくはなかった。
魔王になった者には協力するのが、大公家の盟約でもあり、魔族間で争うことはよしとしなくとも、人の子を蹂躙する機会を逃したくない、とかんがえるものが多かったからだ。
どこかで、もう一度地球に覇を唱えることが出来ても、また世界として切り離されるだけだという意識が、魔族の面々に働いたかどうか、それは知る由もない。
次代の魔王の意思が魔界の行く末を決めると言っても大げさではないのだ。

◆

それにしては、決闘のお申し込み、とかのほほんとしすぎているようでもある。
さっさと自分の意見に反対するものは闇討ちするとか、賄賂を渡すとか。
あれ？これって人間的？
というか、俺とルミが日本で育てられたことになんか裏を感じる。
ルミはこれまでの話をどう思っているのか。
楽しそうに目をきらきらさせて大おばあちゃんを見守っている。
「サルミスラが「魔王になりたい」と言ってくれた理由はまだ聞いてなかったね。もちろん魔界では絶大な権力ではあるし、魔力は配下からの謙譲で増える。「翼を持つ女」達と揉めたようだが、魔王であればやつらもからかいになぞこなかったろう。それくらいには権威のあるものだ。確かおまえが「魔王になりたい」と言い出した

時には、カルーベルの意思は説明しなかった。目的は別のところにあるんだろうが、今までの私達の意志も尊重しておくれでないかい？」

大おばあちゃんはやさしく言った。懐柔しようとする感じではない。

俺はよくわからないなりに、大おばあちゃんはなんだか人間離れしてるくせに人間が好きなんだな、と理解した。

「それって大おばあちゃんは、わたしが魔王になれるって思ってくれてるの？」

考え考え言ったようなルミの言葉。

ほんとだ。なんかルミが魔王になった時の期待が大おばあちゃんから感じられる。

「昨日はたきつけたが期待はしてなかったね。今日のおまえ達をみて、考えが変わったんだろうよ。力と種族の混ざり方がいい。幼いと思っていたが、なにも諦めることはないんだ。なんなら協力もしてやろう」

大おばあちゃんの物言いには、言外にカルーベルの意思に従うならば、という含みがある。

もちろんここは受け入れるべきだろう。しかし。

「どうしようかな。考えてみる」

小首をかしげ、プレッシャーの塊のような大おばあちゃんにルミはそう言い放つ。

わが妹様は慎重なのか、大胆なのか。

俺ならばこの場で「お願いします」即答するところをなんと「保留」という荒業でしのいだのだった。

## 13（後書き）

※神代（かみよ）＝神話の時代

## 14

例えば、自分の側に、小さく綺麗な花が咲いたとして。
それを人に教えるでもなく、摘んで自分の物にするでもなく、ただただ守る、そんな生き方があってもいいのではないだろうか。
実をつけ、種を結ぶことが、季節によって起こることだとしたら、周りを囲い、気温の変化を防ぎ、時間の経過を花に悟らせないことはそんなに悪いことだろうか。

◆

俺達が魔界から帰ることが出来たのは、朝も八時のことであり、二日間気絶のようなものしか味わっていなかった俺としては、当然学校なんて休んで寝るべきだと主張した。ところが、

「夏休みになったら友達に会えなくなっちゃうし。生徒会があるもん」

というルミの高校生らしい御意見のもと、ただいまもそもそと制服に着替えている。
体の方は奇妙なことにあんまり疲れてはいない。
しかし、頭のほうは詰め込まれた知識と、現状認識でいっぱいいっぱいだ。
今日さえやりすごせば、明日も明後日も学校は休みではあるのだが。

制服に着替え階下に下りると、台所には俺達を連れ帰ってくれた

ベルが立っている。
当然のようにコーヒーをいれたりパンを焼いたりしている姿は甲斐甲斐しいが、さわやかな朝に非日常をぶちこんでくれているところが、憎らしい。母さんはどうした。

「お弁当はいかがいたしましょう」

ベルが手を休めず、俺達に尋ねてくる。
お気遣いご苦労様です。というかよく気がつくな。

「購買で買うから大丈夫だよ」

ね？とこちらに合図してくるルミに、買ったことはあるのか、と。俺は視線だけでつっこむ。
俺は弁当を忘れた時に買い食いしたことはあるが、ルミが弁当を忘れた話なんか聞いたことない。

俺達はあわただしく用意された食事を終えた。
玄関まで見送るベルに、いってきます、とさわやかに声をかけて外へと出るルミ。
それを追っかけて出ようとしながらなんとなく、いってきますというのは気恥ずかしくて、

「ベルも地球に魔界を戻したいわけ？　地球が好き？」

と今この場ではどうでもいいことを聞いてしまう俺。

「もちろんです。地球は魚肉ソーセージがある唯一の世界なのです！」

俺の問いは、ベルに力強く肯定された。
うん。そういうことが聞きたかったわけではないんだが。
頭がさらなるわけのわからなさで疲労を蓄積したような気がする。
そうなんだ、とかなんとかごにょごにょ言いながら、俺は玄関を後にした。

◆

授業の記憶はない。
体育も教室移動もない今日は絶好の居眠り日和であり、かろうじて進学校ではあるものの、授業の邪魔さえしなければ居眠りに寛容な我が高校は俺を昼休みまで放っておいてくれた。
正確なことを言えば、何度か俺を起こして、数日の欠席を咎めたいらしい悪友共が妨害をかけてきたが諦めさせた。

受験生としては憂慮するべき事態だが、地元の大学の中でもたいしたことのない学部を希望している俺にはどうでもいいことである。
ちなみにルミが行きたい学部は偏差値が高く俺には無理だ。
大学だけでも合わせようとするこの俺の涙ぐましい努力に、担任は呆れて物も言えないようだった。

魔界がどーのこーのという話になってしまった今、進学や就職のことを「好きなようにしていい」と言った父さんと母さんの思惑もなんとなくわかる。多分どうでもいいのだ。そういえば俺は我が家の経済事情すら知らない。

三年の教室にだけあるクーラーは全く効いていない。
寝汗にまみれて机から頭を上げると、真横の席のクラスメイトが、

廊下の方を指差している。
目をやれば、ルミが来ていた。
周りを俺の悪友共がとりまいている。
俺を呼ぶのではなく、ルミに群がるあたりが、正直でバカな奴等だ。
廊下の方が暑いのに。

起き上がって教室から出れば、バカ共がルミをちやほやしていた。
バカ1は真淵（まぶち）、バカ2は速見（はやみ）といい、俺とは二年の時から同じクラスで、ルミのファンだ。

「かわいいのにな。兄貴がアレだからな」
「デートしてもずっとシンが着いてくるんじゃうまくいかないよねー」

二人は、にこにこと愛想良く相手をしているルミに夢中である。
俺をダシにしないとルミに話しかけることもできないヘタレ共が。
後ろから近づき、俺に気づいた奴等をしっしっと手で追い払うと、

「ルミちゃんまたね」
「三年の教室は涼しいよー遊びにおいでー」

未練たらたらで二人は離れていった。
バカ共のおかげでしかし余計な人間が近づいてきていない。そこは感謝するべきか。
いつもは俺のほうがルミの教室まで出張しているので、こんなことにはならない。

「シン兄（に）ぃ購買に一緒に行こう？」

ルミの誘いは今日の昼飯確保だった。
うちの学校の購買部は漫画のようにパン争奪戦などは起こらない。
ルミが何故俺を誘いに来たのか、と考えて思い当たるフシを口にする。

「金忘れたのか？」

「違うもん。どうせ一緒に食べるでしょう？」

今日も仲良しだねー　と通りすがりの三年女子に声をかけられて、照れながらルミが返してきた。
俺たちは周りからみると異常に仲の良い兄妹にみえる、らしい。
兄妹喧嘩だって普通にしているのだが。いかに俺の連敗とはいえ。
俺のルミへの過保護は多分父親や兄貴の影響だと思う。

二人で購買までの廊下を辿りながらついつい考える。
小さな頃から美少女っぷりを発揮して来たルミは、家族の中で被保護対象だった。
小学校時分は父親が送り迎えをしたものだ。
妙に親しげにプライヴァシーを侵犯してくる人間へのアレルギーは依然として俺の中にある。

変な人間に家族を渡せないだろう？　と親しい人間に打ち明けて、同意が帰ってくることは実際のところ半々だ。
いわく自分のことが忙しい、とか女姉妹にも自分で選ぶ権利がある、とくる。
俺もたまに自分の情熱を傾ける方向がおかしい、と思わないでもないが、やらないで後悔するようなことになるより、やって後悔する方が俺の性格には合っている。

二人で適当に買ったパンや惣菜を、人気（ひとけ）のない涼しい校舎裏で食べることにする。
そういえばいつもルミの周りには人がいっぱいで、学校で二人きりの食事は初めてだ。
膝の上にハンカチを広げ、行儀良く食べるルミ。
周り中からかわいいだの妖精姫だの言われているし、顔立ちが整っていることももちろんわかってはいるが、俺にとっては妹以上ではないはずだ。
ただし、美人は三日みたら飽きるというがあれは嘘だ。
飽きるのではなく慣れてしまう。
化粧をしなくても透明感のある肌、俺と同じシャンプーなはずなのにさらさらつやつやした髪、この暑いさなかに清涼感すら漂わせているルミは確かに美少女だが。
いつでも笑顔で、発言は天然、他人にやさしく責任感と負けん気が強い。
多分綺麗でなくとも人気者だろうに。
外見が恵まれすぎていることはちょっと不幸の元でもあるだろう。
庇いたくなる理由でもある。

ぼんやりと焼きそばパンをかじりながら物思いにふけってしまう。
どうしてもルミに言わなくてはならないことがある。
今日の深夜だって魔界に行くことはわかっているのだ。その前にだ。

最後の一口を食べ終えてルミを見やれば、ルミもちょうど卵のサンドイッチがなくなったところだった。
ちょうどいい。周りに人はいない。

「あのさ、昨日ってか夜、戦ってみて思ったんだけど―」

「やだ」

歯切れの悪い俺のセリフは間髪いれずどころか途中で一刀両断された。

ルミはいつの間に買ったのか、きのこ型有名チョコレートのパッケージをぱりぱり開き始める。

俺はたけのこのほうが食べやすくて好きだ。

「俺まだ、なにも言ってないんですけど」

片手を差し出してチョコを「くれ」とアピールしながら、どう話を持っていくか考える。

「魔王になろうとするのやめようよ、でしょ？」

はい正解です。怒ったり泣いたりされるのはまずい。学校内でそれは相当まずい。

チョコレートのおかげか、落ち着いているルミにほっとしながらも俺は続ける。

「理由きいてくれてもいいだろ」

ちょっとなだめるような言い方になった。弱いな俺。

しかし、ルミは一瞬動きを止め、俺にまっすぐ視線を合わせてきた。

「どうぞ。でもわたしなんだか強かったよ？　シン兄(に)ぃが駄目って言っても―」

語尾は消えたが、ルミの言うとおりだ。

ここでもっと強いのが出てくるに決まってるとか、そんなことは少年漫画のパターンを熟知している俺にだからこそわかること。
ルミが心配だなんてのは、この勝気なお嬢様には通用しない。
ならばだ。

「俺、生き物殺したの初めてなんだけど」

## １５（前書き）

前回までの簡易あらすじ

魔界で魔王位争奪戦をすることになったシン「俺」とルミ「妹」は、最初の夜を魔界で過ごす。

モンスターにいきなり襲われ、大おばあちゃんからされたくもない期待をかけられたルミ。

やっぱりこんなのやめとこうと「俺」はルミを説得しようとしたのだが？

## 15

話をルミのことでなく、俺のことにしてしまえばいいのだ。
変な話、俺のルミへの異常な愛情は一方通行ではない。
ルミもまた、俺のことを心配はしてくれている。
男として兄としてどうなんだとは思わざるを得ないが、同情を買う。これも作戦だ。

「人面鳥達だって生きてたかったろうし、俺ひどいことしたんじゃないかなって考えてる」

あまり心にも思っていないことを言うのは苦手だ。
だが、名づけて「俺トラウマになったんじゃない？作戦」
これは対ルミとしては相当有効なはず。

正直、あの時は心が高揚していてなんとも思わなかったのかといえばそうでもなく。
現実味がともなっていないかったからか、と考えても、人面鳥を引き裂いたのは俺であり、感触を思い出すことが可能だ。
実際のところ、俺は敵意をむき出しにしてきたあいつらを殺したことを、なんとも思っていない。
ただし。この心理状態は異常なんじゃなかろうか、という疑問は抱いた。
化け物とはいえ、人間に限りなく近い生き物を殺して平気だとか。
いつから俺はそんなハリウッドＳＦ映画キャラになったのか、と。

しかしここは、黙って聞いているルミにたたみかけるところだ。

「ルミに俺と同じ思いをして欲しくない、試合に勝つために他の生き物を傷つけるなんて、きっと後で後悔する」

以前読んだ推理小説に、嘘をつくには真実を混ぜろ、と書いてあった。

ルミが生き物を殺して平気な性格だとは到底思えない。

現代に生きる女子高校生とは違う、魔族だとか、魔物だとか、そういう一面を持っていたとしても。

ルミの本質はやさしい１６歳の女の子であり、どんなに賢かろうが、大胆だろうが、後で罪悪感に苦しむのは予想できる。

俺はそんなの見たくない。

あまりの気温に、受け取ったチョコ菓子はすこし溶けていた。

やわらかいそれを食べながら、ルミの反応を伺う。

ルミは少し考えた様子をみせて、俺の手元をじっと見た。

そしてにこっと笑った。

「シン兄(に)ぃ、チョコおいしい？」

ぐはっ。話題の方向性的に、平気で菓子をばくばく食べるのはちょっとマズったろうか。

繊細さのかけらもない人間が何いきなり言ってんだって感じか。

前半は大嘘だとバレバレかもしれない。

しかし大事なのは後半の真実と、ルミに怪我があってはならないという現実である。

「えーっと。たけのこのほうが俺は好きかな」

違う。俺が言いたいのはそういうことじゃない。頑張れアドリブ

がきかない俺。
不意にルミが手を伸ばして、動揺している俺の手をとった。
途端に、これまでのように、ふわふわと幸せな気持ちが流れ込んでくる。
「シン兄(に)ぃは、何も「封印されてない」んだよ。知ってた？」
知りませんでした。でもそれならなんで今まで興奮しても体に変化がなかったんだろう。
ただ首を横にふる俺。
涼しい風が、俺達の間を一瞬吹き抜け、さらさらと側にある木立を揺らした時、それは起こった。
ルミが、俺の手の指を口に含んだのだ。
暖かくやわらかい舌の感触が、俺の体の中に熱を走らせる。
恥ずかしさからなのか、それ以外からなのか、熱源をつきとめる間もなく、すみやかにルミの手と口は俺から離れた。
「チョコついてたよ」
あっけらかんとルミが言う。
俺はなにも言えない。
どう反応すればいいのかわからない。
少女漫画なら大事な場面だ。
しかし、ここで俺が照れてどうする。
「お父さんがね、人狼(じんろう)はどうしても血をみると興奮して我を忘れることがあるって。特にまだ大人になりきっていないシン兄(に)ぃはコントロールきかないだろうから、ルミが頑張って見てあげるんだよって」

がーん。なにそれ。

「鳥さんたちが、シン兄(に)ぃを傷つけたとき、わたしすごく腹が立って、鳥さんなんかやっつけちゃおうって思った。でもやっぱりショックだったかな。いっぱい血をみたのは」

伏せられた睫毛。こっちを気遣った発言。

やっぱり。怖かったんじゃん、って俺が全面的に悪いよね。

ルミにストレスをかけたのは俺だった。

人狼ってなんなんだ。さっぱりわかんねー。

「でもよかった。シン兄(に)ぃが残酷なことイヤなら、もうひどいことはしないよね？　降参してもらえばいいんだよ」

にこっと笑いかけてくるルミ。ぎゅっと俺の手を握って言葉を続ける。

「わたしが、シン兄(に)ぃを守ってあげる。絶対に死なせない」

恥ずかしいのか、目を伏せたままのルミ。

感動的な台詞だ。

嬉しくないはずがない。

ルミの頬が少し赤くなっている。

これは方向性を間違ったという以前のすれ違いだ。

でも俺は嬉しいような恥ずかしいような気分がほわほわと続いて、

「ありがとな」

としか言えなかった。
多分俺の顔も赤い。というか熱い。
そしてそのまま昼休みは終了してしまったのだった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4200u/

妖精な妹は夜だけ魔王

2011年8月17日03時48分発行